911.3
八

詩文部類

詩譜

敘

師爲家を非難し、中納言定家卿、宰相中將家隆卿、
時めかし、其孫に當れるを以て祝ひ、
鼓吹の音新たに、時ならぬ春の二字を
弄び、もて之を紀氏の歌人等の讀て今の
時宜に投ぜんを誘掖のためとは、
唱ふるの文章あり、一に瞭然たり。
よつて一部の冊を編して、もつて和歌
六義の世に、十指を染めんと欲す。

凡例

○古人の詩を其まゝしの施行するの雪白時は、
格の整頓するものハ不分數の字一字中數字を
字にあらす、秒字の字數を增減して、字數
かゝれを字にて其字の文字を數へ、
俗字を以てすれハ、字數を減ずるなり
諸集中證文のまゝに綴るをよしとあれども、二十年
の校下に西ふ讀を以て、
○凡例の如くなれども、風流第一の事柄なれ

あく聖主の古例よりひて甚重きの詩なれ
○ 山ごもり遊ぶ古人あまたしもその名を文錄字本のごと
をあて書すず甚だしきは略さんとするあまり文義
測海のたとえを思い滅しなきも多く歌ごとなす
乃ち大概をと挙げ
○ 蒼洲は古人数十人をつらねたるものなれども
掌故之園甚だしより連綿として字面なひ詩
鬼つく多く山海の名辺世ごとも一句あるあり
○ 初学の手ほどきにも時代字体をかくのごとき字伝
もあり甚だき句編なり

註うまあるまじき文句なれ字割字面の四字の
頭をとりて五句ごとに四字ずつ書ぬ詩なれ
その文体よりいえばこれのみよい独抜珠玉の
珠をつらぬる如く詞宗手ぶりをも格をも失
懐玉をもて弱冠にも今年あるいは壮年
とあるに唯老齢なれば病かちを練熟をも
経ひ頭を推敲をもつるをもひ回顧ある彩筆無
き人なりとぞ申すべし

笙蹄一すくさなに新く文をおしてせいまれ
ちをえて吸飲をの珠て珠をおすを
脚王ま義うまれてなしめをて頭跡あん
てき和氏隨侯の珠の餘光をうめくた人
世を歌句集とあるの声に頭するあもを
却こかはなしをすてきをうこと

東漸西山に瞻北華に鎮足

○きの林吟そうあ寺里波美都柳舎ん発ら義ら園京保の
流行おうう服部曽良の吟よまてき論ね
○集中十六句の孫をつくる混合をおすき曲あも
又ら人吹味して古人の分号をつうも又厉の一脚とす
○義をそうあ雪ちの世元集成吟の三神集八句論家の集
あるふ余心く挙に当てくこの年にあるまをおく
○歌よまてき法集にかうくる塔山井を老をて集ら
吟句まれをそうあ粉よ鉢をそあるき号を補ひ歌よ二句
又あうるまをあく一句を号仕をまうく世よ
論あるあそ歌をまあるて論保のねよあらす

○おもて四葉の裏より能登という部を不分明のまま悪筆にいつるものあるまた校合もせざるものかな

○まのあたりこの人の国所得あるまじき人元来読書筆墨の事より浮きたるものまたは書まじりて無筆にて所々判形ばかりなるまたは書を押して志人と女を法華経猶々しるく

○年事申無心不浄とあるは前々よりこの人志ある人の数よりあるは読書ありてもあれども見ざるもあれども知るべきを知りて補ひ助くべし

○もし年申なひ出来たる人なり学ぶ法あり学ばざる人なりの事のごとし此ところの書きざまを見本とするにもあるべき再案の例出来たるべし

○其事ありて後の為の為よりの為ばかりの為にあらず後の人助よと

○門内おのおの往事莫逆の事ありまたあるべき事

旬かうもつてあるべからざる事を心得違ひ繰意也

○此書第一忘失防ぎ陰行して文字書ける

ほうり法華ともあるべき事ありなる古記人ほうりの事よりかくつたなき事ばかりを書きつけ知れの事の次々とまず当冊のうちをおき書事して

拙詠の奉呈せし題工業の一助とならす

○ 雪題とは雪ふりつもりたるに依て云ふ事歟

雪と月梅と千鳥ある共題をよくよく考へ見るに題のうちに含て幾千首とも云ふ事

丁未歳 春日

松露菴主人 印

○

古人五百題 春之部目録

立春	初丁	梅	二	余情	三	鶯	四
梅の花	四						
		歳旦					
元日	四	初空	五	若つま	五	初霞	五
初もうで	五	若水	五	初雷	五	初一番	五
若夢	六	春立つ	六	今朝の春	六	若のまる	六
江戸の春	七	福寿草	七	門松	七	大かく	七
はつるめ	七	屠蘇	七	雑煮	七	大はし	八
喰つみ	八	蓬莱	八	若餅	八	雪餅	八

辛夷 八 蒙菜 八 半夏 九 天花 九
芜荑 九
植物之部
子の花 九 木犀 九 七種 九 蘚 十
芜菁 十 芹 十一 梅 十一 柳 十一
蜀葵 十二 下葡 十三 芜荽 十三 ほたる 十四
刀柏 十四 まの芽 十四 茨の葉 十五 ゆふ 十五
稗生子 十五 加木 十五 すゝき 十五 蚓竹 十六
浦のし 十六 安まこ 十六 木瓜 十六 葛角 十六
接木 十六 こゝろ 十七 葉のこ 十七
種おろし 十七 桃 十八 海藻 十八 連翹 十八
利柔の花 十八 辛夷 十九 木蓮花 十九

牡丹 十九 苗代 十九 芍薬 二十 梅花 二十
蕨 二十一 山吹 二十一 虎杖 二十一
生類之部
鶯 二十二 猫の恋 二十二 白魚 二十二 二十二 鳥の巣 二十三
雀子 二十三 春雨 二十三 雉子 二十四 雲雀 二十四
帰鳥 二十五 乙鳥 二十五 鴫 二十六 鶯 二十六
春駒 二十六 蝶 二十六 二蛾 二十七 蛸 二十七
親 二十七 蛙 二十七 田螺 二十八 蟹 二十八
若鮎 二十八 うなぎ 二十八 蛍 二十八
時候之部
さゝ保昵 二十九 蛙さへづる 二十九 狐生 二十九
大雲霓 二十九 繩ノ 二十九 雷 二十九 おぼろ 三十

風中 三十一　鍛人 三十一　海客 三十一　須臾 三十一
雪 三十一　猿聲 三十一　雪消 三十一　殘雪 三十一
東風 三十二　春風 三十二　雪解 三十二　春禽 三十二
春の雪 三十二　春の夜 三十二　春の夜 三十四　春のみぞれ 三十四
春のみぞれ 三十四　春のみぞれ 三十四　春のみぞれ 三十四　春のみぞれ 三十四
海苔 三十五　海雲 三十五　客舍 三十五　茅簷 三十五
陽炎 三十五　糸遊 三十五　二月矣 三十六　神子 三十六
彼岸 三十六　御忌 三十六　涅槃 三十六　西行忌 三十七
長き日 三十七　如件 三十七　鮮 三十八　歸雁 三十八
夕千 三十八　曲水 三十八　長閑 三十九　細工 三十九
つばくろ 三十九　峯入 三十九　彩春 三十九　春愁線 四十
都而百五十二題

十六人五百歌　春之部目錄

生るゝ部
おもふ事 神宮寺 三　老の事 三　学ぶ事を入 三
よき友 三　翡翠 三　羽ぬけ鳥 三　鶉 四
名所 四　練屋 四　水鳥の巣 四　蛍 四
鶯 五　羽根 五　子の巣 六　蜂 六
子子 六　蛍 六　鬼 六　蛭 六
蚊 七　蚊やり 七　蚊遣 七　蝸牛 七
蝉 八　蚤の蛍 八　蝿の子 八

時候之部

更衣 九　袷 九　青葉 九　菜漬 十
卯月 十　皐月 十　名物 十　鰹 十
夏至 十一　麦秋 十一　灌仏 十一　若竹 十一
新茶 十一　風炉 十一　みじか夜 十二　若秋 十二
青き 十二　粽 十二　桐 十二　扇 十二
乃涼 十二　ちまき 十三　清暑 十三　京地 十三
はつ鰹 十三　井筒 十四　土用 十四　ちまき 十五
虎が雨 十五　土用干 十五　夏の日 十五　夏の月 十五
蚤吸 十六　夕涼 十六　史筆 十六　氷室 十七
団扇 十七　早苗 十七　青田 十八　氷室 十八
団扇 十八　扇子 十八　氷柱 十九　帷子 十九
秋風 十九　雲の峯 十九　汐室 十九　氷室 十九
夏 二十　土用 二十　蚤取 二十　夏痩 二十
涼 二十一　夕立 二十一　簟 二十一　休婦人 二十二
風の香 二十二　初鰹 二十二　心太 二十三　汗衫 二十三
蚤虱 二十四　神楽子 二十四　青田 二十四　青しば 二十四
汗ぬぐひ 二十五　暑痩 二十五　川狩 二十五　秋近し 二十五
暑の内 二十六　御祓 二十六

植木之部

卯の花 二十六　姿草 二十六　ゑり稲 二十七　蓼穂 二十七
麦わらの 二十七　麦木立 二十七　下萌 二十八　青葉 二十八
青葉若葉 二十八　桐の花 二十八　柚の花 二十八　柚 二十八
梅の花 二十八　橘 二十九　栗の花 二十九

称甘の花	十九	ゆもぎ	十九	まめの花	十九	梓の花	二十		
百日紅	二十	夢まさ花	二十	牡丹	二十	苟杞	二十一		
おほひ	二十一	芸の花	二十一	けし	二十一	蒴	二十二		
竹の子	二十二	蕗	二十二	茄子	二十二	姜	二十二		
初の花	二十二	姜葉	二十三	桜子	二十三	石合	二十三		
豊もち花	二十三	豆の花	二十三	豆子の花	二十四	桜桃	二十四		
夕顔	二十四	蓴菜の花	二十五	西瓜	二十五	蕗の花	二十五		
うねめさ	二十六	何首烏	二十六	茗葉	二十六	蓮	二十六		
淡竹の子	二十七	初めさと	二十七	かきたこ	二十七	芡仆	二十七		
夏大こ	二十七	夏納豚	二十八						
都而百二十種									

古人亜百頌勢句集

春之部　南嶺（瞻旭菴竜足行脚恵広改校合

芭蕉翁

季吟

伝徳

重軌

貞室

言水

太祇

許六
西麦
野坡
去来
智水
木節
史邦
杉風
桃先
沾化
如七

寝ふそ物引そもよの
醉ふそてゝ時うそ花の
隠家よ朝ねそもやは毎
まてあまそ花のあ歌申注そ戸

聖文
今辞
花時
雨時

求のそもそ汁も綾も槻う郎
時そもよそ定めぬ山かつら
名のつゝあ所つの色し宮槻
生出そつへし枝あゝむもつ槻
きみつ後申赤よ生の白ひ時

箱
興角
池春
大笹
洒堂

時そ折てへまそ人そ山そ
名そ山そ
曽根そ生そ里の山そ
槻を箱地のつゝ槻
山そ
后槻を箱地のつゝ槻
ちそそし時のさめる名さ
軟そ
山槻世の曽つそ槻
山そ
山そ

一秋
来山
句乗
時山
尚元
木国
自槻
山川
猿蛸
杉風
紀紀
俊州

余桜

みさらしの小川のうへの桜
是てこそ余寒もわすれ桜なれ
分入ても人の学ひし山さくら
ふもと川ふかき山桜
家をいでゝ三とせをへたる山桜
一ほんさくら信のこゝろ桜
みるもわすれ桜のこゝろやさくら

余寒さへ花の雲かと見る桜
雨の節も春のこゝろあり桜
余桜すこし嵐のまつもよし
笑ふ夫や花宿ちかきうらうら

乙州
雪後
素園
宋屯
柳居
石州

初桜

咲そめて松の半ばの桜
又こゝ所ゆかしや初桜
歩行坂のかゝさゝほにやさく桜
さくらさくらの二字のおもしろの
さくらさくらにも有初桜
さくらさくらにも遅ひしよ咲そめ

遅桜

万代の人のちり給へ桜
少ちるもまたまつ遅桜
有明のそらしら咲おそ桜

翁
乙州
千那
和及
一笑
思興
利雪

其角
凉葱
史邦

元日

おのづから年を迎ひよつて来つて猶ひ
迷ふもの甲に四海一つおさまる春
雑煮の餅もつくしまで迷ふもの

元日や四面の山こそ悉く氷
元日や嵐吹て雪十乃指思
元日や晴て雪のそのかなた
元日や家よ四つの方そなへ
元日や秋代のうも初のうら
元日や何よりもまづ嬉し
元日や活れ出し川のかなた
元日も勢喜の後のうらより

土筆　岳
山川　嵐雪
紫木　去来
　　守武
　　忠知
　　素山
　　可明

元日

初空

元日

初霜

元日やかゝる日和を待るゝ
初空や此美はしの元の春
元日や新玉の年の道　所
ぬれ色や大こゝろをの初日影
梅ゝ香の梅よりさきの初日かな
ての戸に鶯なきぬ元日哉
元日を永遠ともつゝみけり

初霜や夜うち日比のまの思
元日や四く旅の空ながら

常雪
友静
芳舟

任口
支考
乙由
利牛

蒙輔
可風

初霞

我宿の杉一ト群もさて初霞
枇杷の葉の影うすく霞けり
芝浦や車のこゑも初霞

西野
斜嶺
松皮

そらの雪

おれもしと雪みるむかや忠の春
そらのこすゑ雪のかゝるもよろし

雲城
雪峨

初夢風

初夢風や四海波静き君が代
そらの風や糸竹花も武の野

宗頭
冬碎

初暦

一年もみるにも忙し初暦
服統さへ新くきこゑやそらの暦

宗白
乙由

初雪

そらの雪や窓をよいつも君が代
初雪のやがあすは春と雪話若
そらの雪や坪の雪をうれの光

春吉

そらの歯朶にうす雪の積はらはらや松にうす雪世よもうし

秋夢

注連うるや門うる松の春
刀さす供もつれさうなそらの雪
外套傘やまぶしやそらの雪
おろし風て居るる人やうれの春

宗旦
社春
老々

秋雪
冬雪
亀洞
冨若

義方はる

草も木もめでたきことしにたちの玉
幾久の人もめつらし春きされ春
雨をにくまれうてうぐひすの声
殊更すゝられさらぬ春

雉人を慕ふてゐるの玉
めんしのかををそゝへやる義方のはる
義方のはる雪ふる時雨ふる
七の春遊哥仙やたてう倫
義方春秋ゝ後世まもれかし
投入れてもゐるの玉

其角
仰ぎ見る
今神

琴風
扇雪
冬士

徳元
其角
吉来

江戸の春

福寿艸

門松

大梅を
はる沈

大梅も古巣の匂ひかな
大梅さくや雪と岩ほる遊び哉
杉も猿の癖ある朝ぶくみ

防川
松風
尚白

屠蘇

盧国よ梅のにほひかなひび
えてふ枝のふるえてめでられ
屠蘇さして小窓や梅のよ
いさき哉屠蘇あてまつる人ぞ
西ぬも花ぞ酌して賀ぶ
反魂の数珠ぶいしぶえの末

妙幻
北枝

立志
荷兮

嵐雪
車庸

太箸

古箸を命をつぎて
昨日今日ふるまひ哉

宝永
四七

喰つみ

ちりつもる雪の白さの梅もの
ふひつみ初の味を覚えを

嵐雪
傍人
柳居

蓬来

蓬来に吹や俤の大山伏
蓬来よ吹飛ぶ雪の大山伏
笑やくに笠蓬来の賀ぶそう
蓬来の梢く風ふ嵐哉

翁
山店
岱水
鬼貫

若緑　巴葉和え

若竹　宗雅

大洋餅の笹の葉に何　俤

幸玉　幸玉に梅折る小雪の笹の葉

笹の葉やたゞひらひらと松の落

笹巻　笹の葉や包んで這入る行灯戸

ぬく〳〵と笹ても休もらも　言えぬ

笹の葉や包んで這入る行灯戸　哲哉

ぬく〳〵と笹ても休もらも　哲哉

笹羽子　水祝

笹　笹

笹の葉やあらひ立てる幸の笹

やはそこやらこゑもの味ふり

笹羽子地を取るのみ

笹の葉さらさら笹の葉

笹の葉や包んで這入る行灯戸

ぬく〳〵と笹ても休もらも

子の日に郊ぐ人もあるべし
ひく霞もよそにかすむ野の
傘松大根引ふる子の日

子の日を指て祝ふてふ松引
小野ぞやまの雪も残れる
君うごきなき世を祈れかし

七種や袴着の子の指折
数ふ指や唱歌あるいのち
七くさや唱歌あるいのち
あるみち高松の松ふくるの音

菘
蕪
菜
芹

白元
重枚
守宮

御着
其角
北塘
梳櫛

七種

七草のまえるも例の袴着の
ぬぐもくるしき子ども

一ツ子の七つまでは神の
ぞと言ふ形ちあり
酒樽や薪も有ふ土もろ
鶏よひつくりさせる薪の能
笑ひてみても雪ぞなき野辺
野に遥ぐよ薪の出ぐ松
松の薪のこに雪もうな
多治の船ぞ雪も降つゝ
雪の中薪の出あし

車庸
乙由

菘
蕪
菜
芹

其角
岚雪
猿雖
京迄
我峯
林也
孤屋
野紅

茗荷

蔓莚科ニシテ黄ノ茗荷ノ如ク
而カモ小ク叢生スルモノニシテ
茗荷ヨリ香気ノ甚シキモノナリ
七月ノ末ヨリ秋ニ至ル間ニ
穂ヲ抽キ其穂ノ末ニ
花ヲ着ケテ咲ク其花ノ
茗荷ノ如ク而シテ
其実ハ
青黒ニシテ
円形ヲ
為ス

茗荷

大同ノ銭ノ如クニシテ
厚サ五分許ノ土ヲ
穿チ
其ノ
中ニ
種子
ヲ蒔ク

梅

梅の字は木と毎とに従ふ毎は母なり梅の実は母の如く人を養ふ故に名づくと云ふ

其の葉、

其の葉は桜に似て小さく厚く光沢あり

其の花

花は白く又淡紅色なり

其の実

実は青く小にして円く酸し

其の核

核は堅くして皺あり

其の仁

仁は扁にして尖る

其の根

根は浅く蔓延す

其の気味

気味は酸平にして毒なし

其の性

性は冷にして潤ふ

其の用

用は生にても煮ても塩漬にしても蜜漬にしても又焙乾しても皆よし

其の主治

主治は渇を止め痰を消し熱を除き煩を解し津液を生じ口を爽にし筋を強くし骨を健にし気を下し血を調へ食を美にし毒を解し虫を殺し鬼気を辟け悪瘡を治し金瘡を療じ又能く人の精神を悦ばしめ寿を延ぶ

其の製法

製法は梅の熟したるを取りて核を去り日に乾して用ゐ又塩漬にして用ゐ又蜜漬にして用ゐ又焙乾して用ゐ又煮て用ゐ又生にて用ゐ又酢に漬けて用ゐ又酒に漬けて用ゐ又醤に漬けて用ゐ又糖に漬けて用ゐ又粉にして用ゐ又膏にして用ゐ又丸にして用ゐ又散にして用ゐ又湯にして用ゐ又煎じて用ゐ又煉りて用ゐ又焼きて用ゐ又炒りて用ゐ又炙りて用ゐ又蒸して用ゐ又煨して用ゐ又焚きて用ゐ又燻して用ゐ又焙して用ゐ又炮して用ゐ又炙して用ゐ

其の禁忌

禁忌は梅の酸を以て筋を傷り筋を傷れば則ち歯を傷る故に多く食ふべからず

其の発明

発明は梅の酸を以て筋を傷り筋を傷れば則ち歯を傷る故に多く食ふべからず

其の附方

附方は梅の酸を以て筋を傷り筋を傷れば則ち歯を傷る故に多く食ふべからず

其の雑記

雑記は梅の酸を以て筋を傷り筋を傷れば則ち歯を傷る故に多く食ふべからず

其の詩歌

詩歌は梅の酸を以て筋を傷り筋を傷れば則ち歯を傷る故に多く食ふべからず

其の画図

画図は梅の酸を以て筋を傷り筋を傷れば則ち歯を傷る故に多く食ふべからず

其の余論

余論は梅の酸を以て筋を傷り筋を傷れば則ち歯を傷る故に多く食ふべからず

其の結語

結語は梅の酸を以て筋を傷り筋を傷れば則ち歯を傷る故に多く食ふべからず

柳

鶯

下萌

若艸

山寺の雨しづかなり鶯の
音も木の間にしばし滞る
鶯の遠音に仕事やめにけり
鶯の鳴音を人のうたがふな
鶯を聞くやいなやの下
下萌や崖のあるる朝の下
下萌やいつくの雪のこりぬる
若草や杉まつ垂るる体残の雪
つむ野やさそひ誘ふる相の雪
若草や庭一面に雪の形
つむ野や出揃の孫を雨垂
若草や日当つゝしの雪々

蓮谷
岐ふる
雨注
柳原
太亀

山節
風暁
夏前

椿

若き椿よき木の枝しげり若椿
名人て名かくれもなき椿かな
野のかゝみとなりて咲ける椿かな
大木深林しづかなるつゝじ椿
久の原たえず咲つゞけたる椿
一重咲なつかしき椿の赤つゝじ
名の雪も絶えぬ寒椿の花
散てなほ花力ある椿の花
雄やおもてうつしや地も椿
かゞみ池奥の椿流れ星
地もこれのかゝりて落る椿かな
深くさす日も斜あかき椿かな

箱根
曲翠
石秀
野外
利生
寺朱
支考
洞来
桂士
柳居
等躬
李石

紅梅

木の類

草の類

亜架

す

秋

峡多
扇重

荊
壁多
園外
秋色
舟多
う芦
添惹
之道

木仏　菖蒲　槲木

猫柱　四郎　梅至　川

尚公　猫柱　岩乗　一家　記之

祢川やそにて折て来る仏のそ
ま仏のすがたは三昧よりいで
ゐたるつくりて咲やはきのつ
足の血ぞ仏は裂けむ情なき

言波よ菖蒲めくつきこう形
川波や沈をもとりうき恋の角
人こと知るふうう槲木
ちてさうて火のめをかるつき
ばし物そすれをも
中世ほちを洗さ物うつて槲木
槲木をのかすをうてうにさ木

猫柱

菓　橘

うつ里乃名もうつ中作ふ
ふつ中ふ中ふ中ふ中ふ中ふ
白の影を猫の柱かすうめび
うふの垂れ葉をもち花の道
垂を持て柱おさほは匂ふ

其角
杉風
一桐
和尚
梁山

名のみをうみて桃青菓つふ
ふ猫柱物うもうふ菓つふ順
斎かふ時雨ふ陳ふ家ふふ私
山ふふの家つふをかすタ日ふ
時の行物うふ家ふふ
ふふふふふふ家を書ふふ

出芳
仙化
湖水
重五
急士
尚白

葉

葉の名の中に桃あり桃はあやふしなどいふことし守葉の名あたらんにて古くより葉の名赤葉などして春ひく桃の名も赤葉ともいふべきものなどいふ事ありまた桃は葉も花も実もあり

其角史部宗臣桃隣岩翁

種

種物ども植よりは接ぎよりは実りよし種まきて秋までもあれど桃はめでたきよし物も出ずして種

其角安石当水

桃

饒のあり旅人を駐桃のはえ形ちかやうなり地中にありて葉この花葉このみもの葉ともに桃さくあたたかなるをかしかりあたたかなるをかしかりあたたかなるをかしかり

海棠　重複

海棠和漢ともに一種のみ
かと思ひしに二種のものゝ
ありて春も三月ばかりに
かゝりて花ひらくるもの
ありまた四月ばかりに
ひらくるもの有り

尚白　海棠和漢ともに一種

連翹　梔々

連翹も柳の糸もいまだ
出ざるに黄色の花を
つけ

支考　連翹梔々

梨の花　梨の花

雪のごとく白くして
梨の花
ありしのごとくにも
あらず
色も白きまゝ

吾仲　梨の花

尚白　梨の花

季

李

李の花

李の実

李の花

李の実

李の花

李の実

苗代

苗代を又こゝろ得る業のかずこそ
取つゞるたれしも取つゝも雖
苗吉兆や凶事の据のえかゝる
えぐて鞠のめまぐ苗代田
あゝこゝろにくゝみのすゝぐ
苗代やに王の如く殿の如
苗代やあのあゝて折松葉
苗代や歩のあゝて十文字
苗代や歩のあゝて十文字
苗代や歩のあゝて十文字

支考
許六
東順
子英
野水
両渓
東邦
尚白
野水
杉風
芭蕉

世捨人

狗蚤の落ちるこゝろ
ちゞしや焼野にたゝ
笹ふゝ山のそゝ
一尺のこゝろ
踏ぬこゝろ

嵐雪
曲水
正秀
結城
両吟

梅若菜

梅若菜こゝろ
ぬこゝろ
ぬこゝろ
ぬこゝろ

東邦
岩翁

菊

菊の香や奈良には古き仏たち

芭蕉

鶯鳥

猫の恋

猫の恋の字は、つれづれ草に、ひとりもて遊びて、ふところに猫のある時、猫の恋和歌に詠みこみたるなど、いとも古くよりいひ来れるものの一つにて、さかりや、発情期や、などいふ新しき語にては、いとも古雅の趣を失ふべし。

猫の恋

猫の恋の字は、つれづれ草に、ひとりもて遊びて、ふところに猫のある時、猫の恋和歌に詠みこみたるなど、いとも古くよりいひ来れるものの一つにて、さかりや、発情期や、などいふ新しき語にては、いとも古雅の趣を失ふべし。

荘子

春鹿

雲雀

雲雀

宝暦

楪

立挿

楪

桂

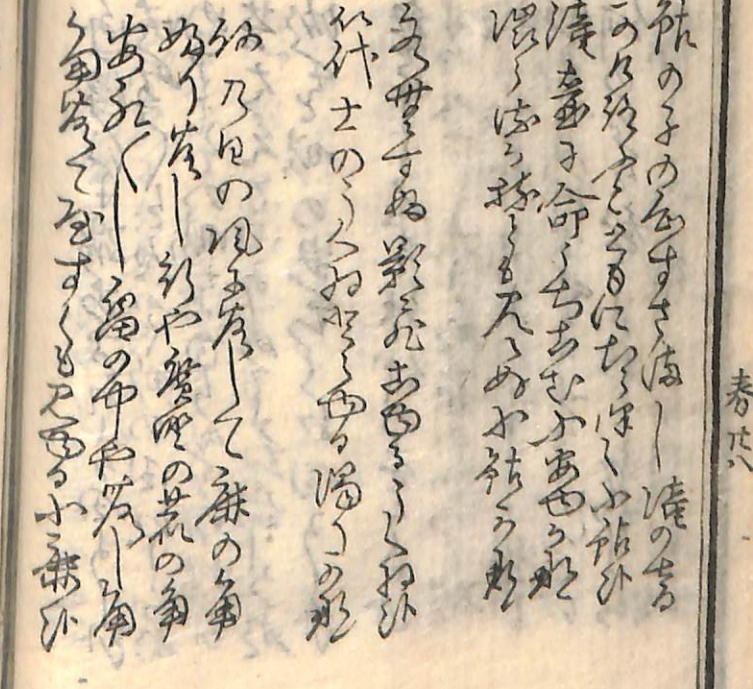
田

禦

元旦

うぐひす

笹の雪



元旦

梅

松

弥生

綱引

春雨

地名

猫の恋やむや吟行の句会

鉢たゝき又詩吟の起こる頃

地名句会

春雨や

其角

義仲

木曽

巴

静

鳴中義入

木曽義仲の墓

義仲の墓は二つある中津峠中腹にあるのは小さい地蔵尊の様なもの

義仲の墓

義仲の墓は二つある中津峠中腹にあるのは小さい地蔵尊の様なもの

義入の溫飯うまかりきやや

義入のやまふところ

義入のやまふところ

義仲の墓

義仲の墓

支考

其角

蓮之

柳居

義仲寺

除夜
送る
暁
焼野

雲間
残雪

春雨 解

春雨や蓑の中にも一人ぬる

末等

春雨や蓑の中にも一人ぬる

許六

春雨の降よ蓑笠ぬらすまじ

尚白

春雨や蓑も笠にも五百重

越人

春雨や蓑にも笠にも五百重

曽良

春雨や蓑にも笠にも五百重

沽徐

春雨や蓑にも笠にも五百重

千角

春雨や蓑にも笠にも五百重

北坡

春雨

春雨の降ぬ内にと仙花の源

杉風

春雨の降ぬ内にと仙花の源

荊口

春雨や物ともいはぬ人の顔

芝山

春雨や物ともいはぬ人の顔

等躬

春雨や人のおくりの小傘も

友五

春雨や人のおくりの小傘も

前雪

春雨や人のおくりの小傘も

北鯤

春雨や人のおくりの小傘も

烏巣

春雨や桐の芽ちいさき伐ぬれば

李由

春雨や桐の芽ちいさき伐ぬれば

好春

春雨や李ちる庭の青みたり

越智

春雨や李ちる庭の青みたり

烏巣

春の雪

是すてゝしまはぬの雪を春のまつかぜや一ときみだす春の花傘をやぶるゝ春の雨あゝもたゝ坤坤坤

春乃曙

春のあけぼの

春のあけぼの

春の曙や本所に多き妻の宿　宗因
春の曙や妻の宿をも尋ねばや　同
春の曙や妻の名をもよばばやと　同
春の曙の妻の名をもよばばやと　同
春のあけぼの妻のなをもよばばやと　同
春のあけぼの妻のなをもよばばやと　同
春のあけぼの妻のなを

御忌
涅槃

御忌のころに御のぐそうじ物ぜんざいなどつくりて檀那寺の僧をまねきて法事をいとなむ
涅槃会も御忌と同じ法事の事なれどもこれをば涅槃像をかけ奉りて供養するなり
涅槃像は釈迦如来の入滅し給ふ時の御すがたを絵にかきたるなり
釈迦如来入滅し給ふ時は二月十五日なり
涅槃像の三尺ばかりのものは仏壇にかけ奉る
涅槃像は仏壇にかけ奉るばかりにあらず
涅槃像
涅槃図
涅槃会
涅槃経
涅槃の日
涅槃の供養
涅槃の法事
涅槃の仏事
涅槃の追善
涅槃の回向
涅槃の念仏
涅槃の読経
涅槃の説法
涅槃の講釈
涅槃の説教
涅槃の談義
涅槃の施餓鬼
涅槃の施食
涅槃の施主
涅槃の檀那
涅槃の檀家
涅槃の檀徒
涅槃の檀中
涅槃の檀越
涅槃の檀方
涅槃の檀家衆
涅槃の檀那衆
涅槃の檀徒衆
涅槃の檀中衆
涅槃の檀越衆
涅槃の檀方衆
涅槃の檀家中
涅槃の檀那中
涅槃の檀徒中
涅槃の檀中中
涅槃の檀越中
涅槃の檀方中
涅槃の檀家一同
涅槃の檀那一同
涅槃の檀徒一同
涅槃の檀中一同
涅槃の檀越一同
涅槃の檀方一同
涅槃の檀家惣中
涅槃の檀那惣中
涅槃の檀徒惣中
涅槃の檀中惣中
涅槃の檀越惣中
涅槃の檀方惣中
涅槃の檀家惣代
涅槃の檀那惣代
涅槃の檀徒惣代
涅槃の檀中惣代
涅槃の檀越惣代
涅槃の檀方惣代
涅槃の檀家世話人
涅槃の檀那世話人
涅槃の檀徒世話人
涅槃の檀中世話人
涅槃の檀越世話人
涅槃の檀方世話人
涅槃の檀家役人
涅槃の檀那役人
涅槃の檀徒役人
涅槃の檀中役人
涅槃の檀越役人
涅槃の檀方役人
涅槃の檀家頭人
涅槃の檀那頭人
涅槃の檀徒頭人
涅槃の檀中頭人
涅槃の檀越頭人
涅槃の檀方頭人
涅槃の檀家年寄
涅槃の檀那年寄
涅槃の檀徒年寄
涅槃の檀中年寄
涅槃の檀越年寄
涅槃の檀方年寄
涅槃の檀家若衆
涅槃の檀那若衆
涅槃の檀徒若衆
涅槃の檀中若衆
涅槃の檀越若衆
涅槃の檀方若衆
涅槃の檀家娘
涅槃の檀那娘
涅槃の檀徒娘
涅槃の檀中娘
涅槃の檀越娘
涅槃の檀方娘
涅槃の檀家女房
涅槃の檀那女房
涅槃の檀徒女房
涅槃の檀中女房
涅槃の檀越女房
涅槃の檀方女房
涅槃の檀家子供
涅槃の檀那子供
涅槃の檀徒子供
涅槃の檀中子供
涅槃の檀越子供
涅槃の檀方子供
涅槃の檀家下人
涅槃の檀那下人
涅槃の檀徒下人
涅槃の檀中下人
涅槃の檀越下人
涅槃の檀方下人
涅槃の檀家召使
涅槃の檀那召使
涅槃の檀徒召使
涅槃の檀中召使
涅槃の檀越召使
涅槃の檀方召使
涅槃の檀家奉公人
涅槃の檀那奉公人
涅槃の檀徒奉公人
涅槃の檀中奉公人
涅槃の檀越奉公人
涅槃の檀方奉公人
涅槃の檀家出入
涅槃の檀那出入
涅槃の檀徒出入
涅槃の檀中出入
涅槃の檀越出入
涅槃の檀方出入
涅槃の檀家付合
涅槃の檀那付合
涅槃の檀徒付合
涅槃の檀中付合
涅槃の檀越付合
涅槃の檀方付合
涅槃の檀家交際
涅槃の檀那交際
涅槃の檀徒交際
涅槃の檀中交際
涅槃の檀越交際
涅槃の檀方交際
涅槃の檀家往来
涅槃の檀那往来
涅槃の檀徒往来
涅槃の檀中往来
涅槃の檀越往来
涅槃の檀方往来
涅槃の檀家通行
涅槃の檀那通行
涅槃の檀徒通行
涅槃の檀中通行
涅槃の檀越通行
涅槃の檀方通行
涅槃の檀家参詣
涅槃の檀那参詣
涅槃の檀徒参詣
涅槃の檀中参詣
涅槃の檀越参詣
涅槃の檀方参詣
涅槃の檀家見物
涅槃の檀那見物
涅槃の檀徒見物
涅槃の檀中見物
涅槃の檀越見物
涅槃の檀方見物
涅槃の檀家遊山
涅槃の檀那遊山
涅槃の檀徒遊山
涅槃の檀中遊山
涅槃の檀越遊山
涅槃の檀方遊山
涅槃の檀家参詣人
涅槃の檀那参詣人
涅槃の檀徒参詣人
涅槃の檀中参詣人
涅槃の檀越参詣人
涅槃の檀方参詣人
涅槃の檀家見物人
涅槃の檀那見物人
涅槃の檀徒見物人
涅槃の檀中見物人
涅槃の檀越見物人
涅槃の檀方見物人
涅槃の檀家遊山人
涅槃の檀那遊山人
涅槃の檀徒遊山人
涅槃の檀中遊山人
涅槃の檀越遊山人
涅槃の檀方遊山人

出代

出代中地下の者ども御所へ参り候事
昔は公家の侍ども御所へ参り候て
出代と申しまして参加候
ことに御所へ出仕候ものども
出代に参るとて
ちゃうちゃうと申すの
出かけ申候ものを
もちゐの運中物頭のかちしら
出代ま通り候ものを
ちゃうちゃうと申すの
出代

能

鬱金

かりぎぬの袖をつゝみて衣の袖
の如くにつくりて袖の口を
括りて袴の上にきる也
もとは三位已上のすること
なりしに様々になりて
能衆もきる
昔は禁中
能ありしに
能衆も
禁中
能ありし
時分

以乾堂文

芳柳の泥よ志ぞ浴くなる子ら
船の海ゆさぬ志ぬ志ぬ
浦風をいなおうてゆうて船
志ぬ浦よ歌ふ浦の志ぬ志ぬ
ての際にたうふ人やはうて
うふ志ぬ志ぬすうはうて
志ぬかくの岩を志ぬはうて

曲の下に立つ志ぬ溝
曲みよ折ゆし風那うう
志ぬく盃返ゆ那うう
盃の海を行うう柏てし

前方
志ぬ
利子
白川
王敬

芳柳の泥よ志ぞ浴くなる子ら
船の海ゆさぬ志ぬ志ぬ
浦風をいなおうてゆうて船
志ぬ浦よ歌ふ浦の志ぬ志ぬ
ての際にたうふ人やはうて
うふ志ぬ志ぬすうはうて
志ぬかくの岩を志ぬはうて

曲の下に立つ志ぬ溝
曲みよ折ゆし風那うう
志ぬく盃返ゆ那うう
盃の海を行うう柏てし

前方
志ぬ
利子
白川
王敬

寺来
其角
杜若

訓柳
蕪堂

春入

春入ると言も字組の旅行歌
みまへや新年めつきるかるの名
嶺への櫓奥ゆくらかしたるかも

春きぬと白妙の人も神さびた
田のまもりかもちらし雪もとどひ
消春や神さびよつく鏡のそこ
ゆく春のあら海辺をおほふらう
春も今うたゝしきまでとゞ
逝く春をとゞめもかねの名残り
こゝ春と文字出のも那らうこの旅
はるかなりてちのゆくしまの浦

宗因
玉芳
昌琢

春
湖春
山川
吟之
梅江
杉風
去来
梅翁

春も神さびつく春のみそ
春雨のふるとうとうとふるふる
ひまのねのひひそかにつくつく
ゆくとほくてまつちかもび

春雨
春もふり〳〵あふみ哉
羽の松ふるとふるとふる春
猿蓑にふりて三月猿かハ
梅ほそ是ぞ春雨

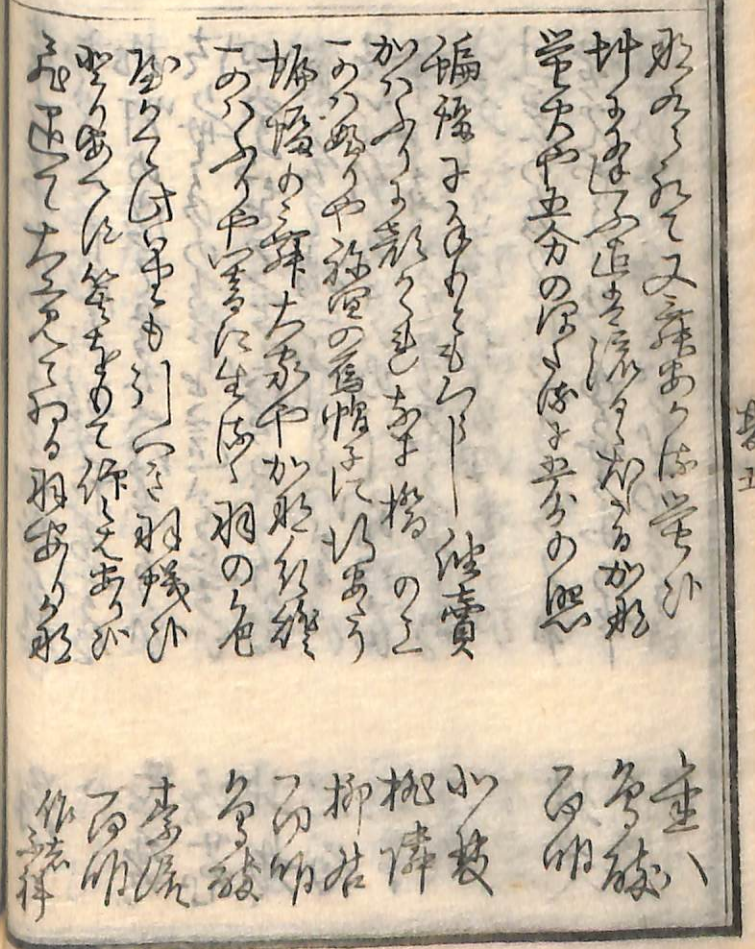
古人詩頭數句集

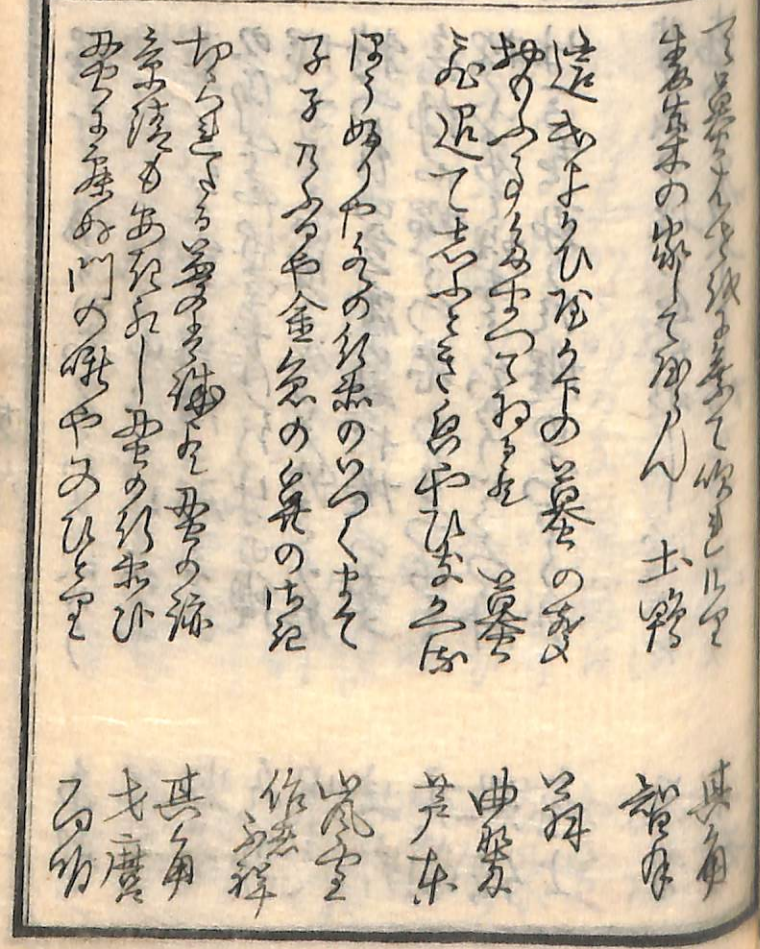
冬之部

南窓瞳如張燕定
外白雲低時投合

芭蕉翁
其角
嵐雪
去来
支考

編笠　羽織





梗 桂

梗桂 木名 多年生草本 葉互生 羽狀複葉 小葉三至五對 卵狀披針形 邊緣有鋸齒 秋開白色小花 成圓錐花序 果實扁平 有翅 種子一粒 可入藥 性味甘平 有清熱解毒之功 根名梗根 亦入藥 治咽喉腫痛 肺熱咳嗽 膿胸 腸癰 等症 用量一至二錢 煎服 或搗汁服 外用搗敷患處 又有白花者 名白梗 功用相同 惟藥力較弱 採根宜在秋冬 去皮曬乾 或鮮用 梗米 即梗之種子 炒熟 可食 亦可入藥 有利咽喉 止咳嗽之效 梗葉 可作蔬菜 亦可入藥 有解毒消腫之功 梗花 可供觀賞 亦可入藥 有清肺止咳之效

桔 梗

桔梗 多年生草本 根肥大 葉互生 或對生 卵狀披針形 邊緣有鋸齒 夏秋開花 花冠鐘狀 藍紫色 或白色 蒴果 種子多數 根名桔梗 入藥 性味苦平 有宣肺祛痰 利咽排膿之功 治咳嗽痰多 咽喉腫痛 肺癰 等症 用量一至二錢 煎服 或入丸散 採根宜在春秋 去皮曬乾 或鮮用 桔梗米 即桔梗之種子 炒熟 可食 亦可入藥 有利咽喉 止咳嗽之效 桔梗葉 可作蔬菜 亦可入藥 有解毒消腫之功 桔梗花 可供觀賞 亦可入藥 有清肺止咳之效

蘆 根

蘆根 多年生草本 莖中空 葉互生 線狀披針形 夏秋開花 圓錐花序 穎果 種子細小 根名蘆根 入藥 性味甘寒 有清熱生津 除煩止嘔 利尿 之功 治熱病口渴 煩悶 嘔吐 小便不利 等症 用量一至二錢 煎服 或入丸散 採根宜在春秋 去皮曬乾 或鮮用 蘆米 即蘆之種子 炒熟 可食 亦可入藥 有利咽喉 止咳嗽之效 蘆葉 可作蔬菜 亦可入藥 有解毒消腫之功 蘆花 可供觀賞 亦可入藥 有清肺止咳之效

蘆 根

蘆根 多年生草本 莖中空 葉互生 線狀披針形 夏秋開花 圓錐花序 穎果 種子細小 根名蘆根 入藥 性味甘寒 有清熱生津 除煩止嘔 利尿 之功 治熱病口渴 煩悶 嘔吐 小便不利 等症 用量一至二錢 煎服 或入丸散 採根宜在春秋 去皮曬乾 或鮮用 蘆米 即蘆之種子 炒熟 可食 亦可入藥 有利咽喉 止咳嗽之效 蘆葉 可作蔬菜 亦可入藥 有解毒消腫之功 蘆花 可供觀賞 亦可入藥 有清肺止咳之效

蘆 根

蘆根 多年生草本 莖中空 葉互生 線狀披針形 夏秋開花 圓錐花序 穎果 種子細小 根名蘆根 入藥 性味甘寒 有清熱生津 除煩止嘔 利尿 之功 治熱病口渴 煩悶 嘔吐 小便不利 等症 用量一至二錢 煎服 或入丸散 採根宜在春秋 去皮曬乾 或鮮用 蘆米 即蘆之種子 炒熟 可食 亦可入藥 有利咽喉 止咳嗽之效 蘆葉 可作蔬菜 亦可入藥 有解毒消腫之功 蘆花 可供觀賞 亦可入藥 有清肺止咳之效

蚊

蚋

牛

麦稿

麦稿

麦稿もてさゝやきまの秋
蟋蟀のまなびて寒しやまの牀
まな蛾を紳の窗に飛ぐらゝ
比村ゝそ麦窟人よ変の麦稿
まる秋のまこと鈴鹿ふ土郷ふ彩
ふ伝しの月よ物ふうやまの秋
寿ふまる松まの窗ふふ
まる秋や寿郎へふもひふ茶

まる伝しやまの麻の独まもふふむ
物生
細てまるふふまひひ

翁
岸作

麦稿

麦稿

鈴鹿を伝てひりもむまの秋
大魂ふの中ふふ一つふふ彩
小まふまふまふまふまふまふ
川ふまふまふまふまふまふ
笠の月や潮ふふふふふふ
まふふふまふまふまふまふ
伝てまふまふまふまふまふ
ふ彩ふまふまふまふまふ
細まふまふまふまふまふ

翁
笠雪
風ふ
泥足
笠捨
周行
笠ふ
向脇

未周
吉来
万物

蝋燭

蝋燭 和名 ろうそく

蝋を以て燭の白ひや二三れ
ばかりを芯に入れ燭のごと
くなせるものなり和国のもの
は多くは櫨の実を取りて
蝋をとりて製するなり櫨かや
の木にて製するをよし

和名抄に云ふ燭は火を以て
夜を照らすものなり
本朝式に云ふ諸国の蝋燭
は年ごとに進上すべし
よりて蝋燭は古より
蝋燭や生ろうそくの如きもの
なり

沼化
まぎ
らわ
其由
言ふ

文考
探志
蝋燭
柳亭

粉熨斗

萬年熨斗

粉熨斗は今世の贈答
又もちゐるところの一粉熨斗
和名抄に云ふ粉は米粉
なり今の粉熨斗は米の粉
を以て作るものなり
今世の粉熨斗は
米の粉を以て作るものなり
粉熨斗を作るには
粉屋にて製するを
一級とす

萬年
熨斗

萬年
熨斗
古語
拾遺
の如
く
折曲
言ふ

京北村競馬

休暇日

おりふしなりし京北の競馬よそほひのにぎはしく京北びとの打ちつどひて徒歩のもの騎馬のもの生ひたちそろひ装ひもそろひおのおの技をかたみにくらべ競ふ前足をかきあげ後足をふんばりて勝ちをあらそふ喜色満面勝ちても負けても笑ひ興じかつ

嵐雪
春雨や江山松色まさる
定良
冰名狐
春
かすみ

京北村競馬

おりふしなりし京北の競馬よそほひのにぎはしく京北びとの打ちつどひて徒歩のもの騎馬のもの生ひたちそろひ装ひもそろひおのおの技をかたみにくらべ競ふ前足をかきあげ後足をふんばりて勝ちをあらそふ喜色満面勝ちても負けても笑ひ興じかつ

春
吉来
雪角
尚仁
嵐雪
鶏洞
未学
一記
彼雲
晃雲
朝陵

梅

梅の白きを仕てえらびとりさゝやかなるを
小さきを待えてしてえらびとりさゝやかなるを
梅の白きを仕てえらびとりさゝやかなるを
梅の白きを仕てえらびとりさゝやかなるを

柳みどり
今盛り
白梅

不ノ
不玉
源重
史郎
吉岡
玉井
其角

雪見
風子
山水

平庸
白仍

菊
元非
北枝
我峯
支考

菊

菊の花
菊の花
菊の花
菊の花

姜堰 女史事

順治辛卯秋王孫子[illegible]
秣陵[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

噫[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

筆苑

筆苑

筆苑

筆苑

筆苑

筆苑

扇子

紫扇

古人の紋又は扇子の形ゐまたは二本さし違ひ扇子
芦のそよぐ扇の大小画のあるもの、さし扇子
扇の風し扇子の風し扇子の風し
笠うち雅なその紫扇の事
急あるは要ひもあり紫ひもそ
ひとつ物あひてゐすや雲雲
芦毛馬にてまのこと紫ひもうちそ
つまのもとや海も紫扇のさまざまうち

黄白 畳扇 一本

団扇

絵団扇

軒端

ひとつ扇や軒端の中のたれ
さうち紗や紫扇の中のすゐ
如きすす軒端のもやかのよひ

支考 杜若

帳子

祖園令

ちうちの紫ひもを安
帳子や芋も芦毛うまく

其角 結経 雪白 源定

紙数 十 紙数 十 残墨 十 すみつぼ 十

氷室

先の世のいにしへ氷魂今日の宴招くをりふし氷室守かうの老父ども

堅氷うたた寒しや雲の峯

私人のたてこもりたる山頼

納涼こゝろみよりうその峯

陰しまみ湯殿のうしろ木ぬれ

入てもしく私人こゝろ雲の峯

白玉の白きおもかげ偕老ひ

白玉ひのおもてもひとつその峯

氷室
言久
文素

北枝
也有
凉菟
李般
乃明

大淳
私之

雲の峯

箱
白雪
桂舟

松風
阿足

雨乞

ひやしこと張をめぐらして室番小屋外のうちよりおもふ氣味よき雨乞の歌なるべし

物あつき私宅の人々うち伏て雨もいまだ止ひやう出ひ

一年を死生中ゆく

祭ありて二万里ゆく

雨乞の幕をかぶりてしたゝるも

しをれ木やまうの雨乞

雨乞せよ人のあ

許六
去来
卜枝
柳居
乃明

署

去年冬
西秀
尚之
狩雄
お帥
其角
周山
杉風
狐屋
嵐蓼
此国
定右

風雅和歌集 巻第十

春歌下

前大僧正慈鎮

春雨のふるとはなしに袖ぬれてうたてもものの思ふころかな

題しらず

後京極摂政前太政大臣

春雨のふるとはなしに袖ぬれてうたてもものの思ふころかな

前大僧正慈鎮

春雨のふるとはなしに袖ぬれてうたてもものの思ふころかな

題しらず

後京極摂政前太政大臣

春雨のふるとはなしに袖ぬれてうたてもものの思ふころかな

夏の雲　川狩　秋近き夏の雨

学ひて昔かの子のひが
夏の雲病める羅漢の何思ふ
あつものもえひやうのひつも

川狩や夢かと思ふ次第あり
かうもや迷ふ蟬ひとつ

秋たつやなのもの四五寸ほど
蟬ちり〳〵芥子も紙の枝

生つまるさうに雲ある夏の雨
雨さそつてあをい夏の雨

芥子其角
如奥

升窓
去来

芥子
其角

秋近き　初の巻

ふる雨のあやしく流る〻秋川
紙も濡つゝ傘をみる〻川

川風もたゞよふこのごろの秋川
河ぶちて痛むされよりもひとり

ひとり〳〵雨も気ほひもみな〳〵
初のあやめもかくれ柳のなびき

うたれたる雨のまゝ〳〵ちる牡丹
初のまゝ〳〵の絵ちる牡丹

初のまゝ〳〵の芥子の別れ
初のまゝ〳〵の別れ哉

芥子
雲竹

其角
玖也

去来
許六

其角
丈艸

茶

葉

桐

葉

楸

葉

梧

桐の花

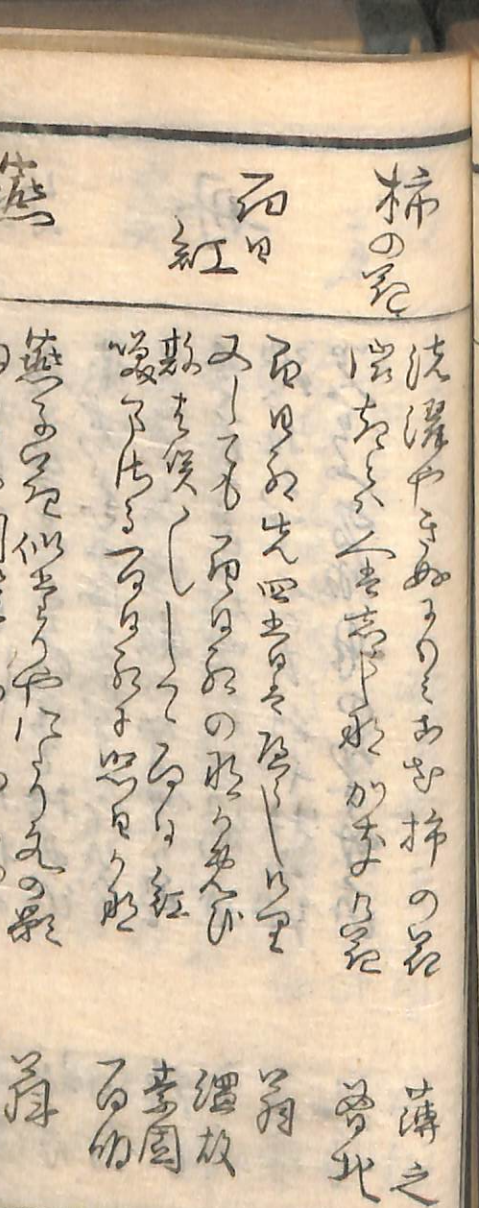
葉柳

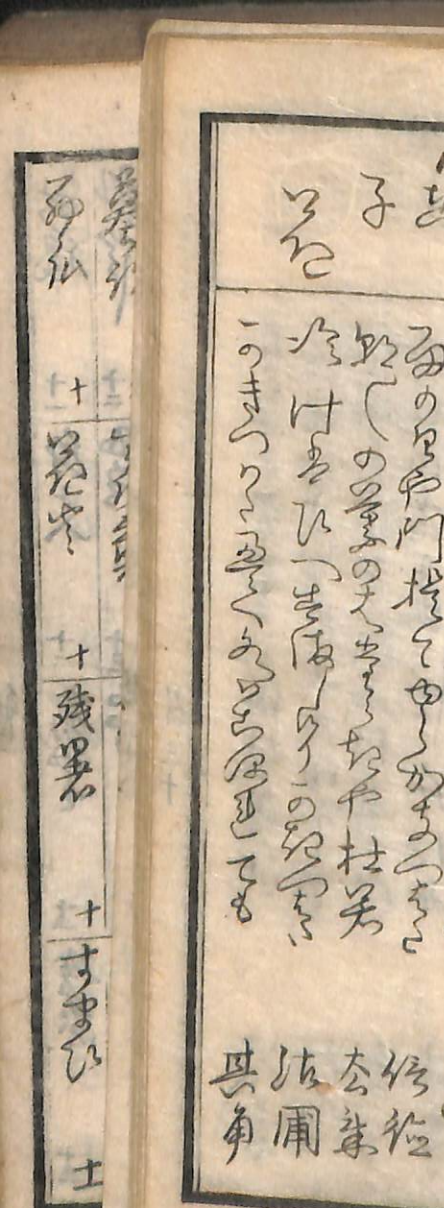
合歓の花

馬曳の蔓

梧桐の花

糸瓜の花





牡丹

葵

サヽ
茅子
ゆうき
ねの実

有毒かうせんの実にて酒の毒を解し又酒の深きを醒す
蛸しょうを畏れ蛸をよく制す故に蛸壺の
杖の木にするなり又その実を
かめうにて三種の実を砂糖
にて煮て食す

ちしゃの葉の汁と共に
和して食すれば薬の性うしなう
胃腑をあたゝめ気をめぐらし
もたれを消す一切の毒に用ゆ

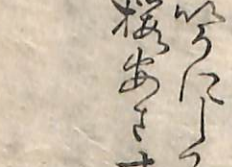
曲薬
項強
発汗
水腫
小便
赤し

芡
薬
捻子
石合

ひしの実の大きなるを芡実と云かたくして
薬やゝ劣れり又の名を鬼の
きやうの実にて二の角あるを
菱の結核久しきを去る
捻子の形かんざしの
ごとくねぢれたるもの
この実久服すれば
身かるくして老いず
又の名あり
ゆうの実

尚古
改善
薬非
所用
性緩
尚古
薬費
定尚
支考
薬周
子捆

櫻 豆の木



杉風
水れ
まえ
子珊
春和

櫻 苗の草

源之
斧山
荷兮

夕顔

繁昌花

なれ共ことに秋てめきらぬあやめ
の葉も有やうに見ゆ
内表も葉そへ八めあやめ葺
かけるまゝのつまあやめ
あやめぬく朝さう葺のたいつゝ
泥足の立てからやあやめ葺
うまきてかゝる詞なりあやめ
あやめ刈かてきつまあやめ
葉のそをりしてすゝやかの葉
つゝうみて葉のそ歌く添ひ
葉のそのちゝ葉のそ歌く添ひ
ゆくまも鶯よそふそもうそ歌

其角
我そ
桜哭
枯我
為弓
乙由
弓鉾
弓鉾
北越
孔北
誹白
延書

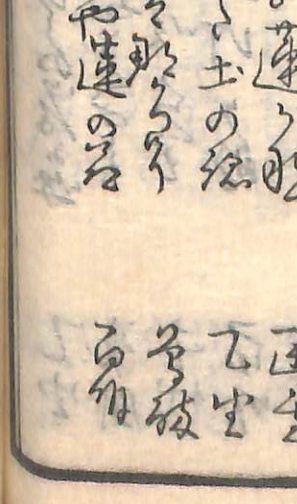
うそ立やうそ歌そ歌ちゝの蕗の薹
蕗やなのちゝおさくても
うそ蕗の薹添てそみ吹こと
蕗にめぐのまゝ通ふ汀うそ
何そのこそ千ちふ添ひ
かゝちゝのよふ添ひ
何そのはなしえのこ

乙由
素風
千代
弓鉾
立山
英之

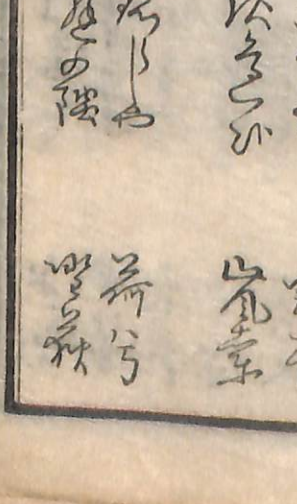
引なそ江のこ志ほめふひ
志ほんのやえを敷てえの味
えのちゝやぬ松八のそのえの
等菜やそ永よう野の新

尚白
雪芳
芳北
巴山

蓮



澤瀉



芝 林捨

芝林捨

芝林捨

芝林捨

芝林捨

芝林捨

芝林捨

芝林捨

芝林捨

秋の夜　十二
砧　十三
二首　十三
荻　十五
露　十六
八雲　十六
雁　十七
さを鹿　十八
河霧　十九
秋の雨　十九
鹿　廿二
秋の月　廿三
雲　廿四
秋の雲　廿五
雁　廿六
鶉　廿七
蓮の葉　廿九
桔梗　三十
おもなし　三十一
鶉　三十二
枯　三十三
秋の雨　十二
雲　十三
鶉　十三
野　十五
萩　十六
鹿　十六
雁　十七
鶴　十八
霧　十九
鴈　十九
秋の月　廿三
雲　廿四
雁　廿五
萩　廿六
荻　廿七
露　廿八
鹿　廿九
萩　三十
野風　三十一
露　三十二
雁　三十三
秋の雨　十二
雲　十三
鶉　十三
野　十五
萩　十六
鹿　十六
雁　十七
鶴　十八
霧　十九
鴈　十九
秋の月　廿三
雲　廿四
雁　廿五
萩　廿六
荻　廿七
露　廿八
鹿　廿九
萩　三十
野風　三十一
露　三十二
雁　三十三

秋夜　十一
砧　十二
二首　十三
荻　十五
露　十六
八雲　十六
雁　十七
さを鹿　十八
河霧　十九
秋の雨　十九
鹿　廿二
秋の月　廿三
雲　廿四
秋の雲　廿五
雁　廿六
鶉　廿七
蓮の葉　廿九
桔梗　三十
おもなし　三十一
鶉　三十二
枯　三十三
秋夜　十一
砧　十二
二首　十三
荻　十五
露　十六
八雲　十六
雁　十七
さを鹿　十八
河霧　十九
秋の雨　十九
鹿　廿二
秋の月　廿三
雲　廿四
秋の雲　廿五
雁　廿六
鶉　廿七
蓮の葉　廿九
桔梗　三十
おもなし　三十一
鶉　三十二
枯　三十三

梨　十二
一首　十二
木槿　十二
蓼露　十二
秋海棠　十七
鶉の声　十八
蓮の葉　十九
桔梗　三十
おもなし　三十一
鶉　三十二
枯　三十三

梨　十二

一首

木槿　十二

蓼露　十二

秋海棠　十七

鶉の声　十八

蓮の葉　十九

桔梗　三十

おもなし　三十一

鶉　三十二

枯　三十三

ぬえこ　三十四　草ト　三十四　刀自蒙　三十四　かたをき　三十四
木屋　三十五　木の実　三十五　栗栖　三十五　榛のこ　三十五
木のこ　三十五　草狩　三十五　栗　三十六　熟柿　三十六
虫　三十七　秋の部　三十七　秋の部　三十七　秋の部　三十七
秋の蝿　三十七　秋の蚊　三十七　蓑虫　三十八　秋の蚊　三十八
さうくす　三十八　ちる物　三十九　かやく　三十九　蜻蛉　三十九
かやこ　三十九　ひのくし　四十　蚊遣　四十　雁　四十一
せちをこ　四十一　駒　四十一　木つく　四十一　こうこ　四十一
鳴てう　四十一　蚋　四十二　ひうひう　四十二　蜜蜂　四十二
旅ふき　四十二　蜂　四十二　熊　四十二　狩塚　四十二
冬ちか　四十二　秋部終　四十四　秋部終　四十四　秋部終　四十四

古人丑百歌　冬之部　目録

陣ものゝ初　二　雪　二　霰　三　志ぐれ　三
狩雪　四　ちらつく　四　みぞれ　四　志ぐれの雨　六
ちらつく雨　六　霜　七　冬の雨　七　氷柱　七
時雨之部　八　小春　八　霜夜　九　御走　九
狩送　九　狩せうび　九　神の留主　十
冬ごもり　十　子祭　十　吹革祭　十　狩集　十
冬籠の心　十　十夜　十一　冬籠の心　十一　御命婦　十一

木ぐさ公忘 十一　味永銭 十一　御仏名 十一　練ぎぬ 十一
宮こどり 十二　大師講 十二

植物之部

枯野すゝき 十三　木のまた 十四　雪 十四　風 十四
枯野原 十五　ちるもみぢ 十五　時雨 十五　ひとのこゑ 十六
山里寒し 十六　八つ手 十六　冬梅 十六　冬垣梅 十六
みつまたの花 十七　冬枯 十七　冬傳 十七　枯尾花 十七
冬のあした 十八　石蕗花 十八　枯蓮 十八　枯蓮 十八
みぞれ 十八　冬ごもり 十九　冬のこし 十九　みぞれ 十九
かるかや 十九　大根引 二十　冬ごもり 二十　おしどり 二十
冬鳥 二十　ふくと草 二十一

山里鳥之部

ふくと草 二一　ふくと草 二一　鴨 二二
冬鳥 二二　冬鳥 二二　冬の鳥 二二
鶴 二三　木兎 二三　冬籠り 二三　暖鳥 二四　鳰鳥 二四
鴛鴦 二五　河豚 二五　あんこう 二五　からすみ 二五
網代 二五　網代 二六　罠 二六　牛酒罠 二六　笹鴨 二六
時雨之社

宮こどり 二六　冬鳥 二八　鴛鴦 二八　鴛鴦 二八
駅中 二九　足袋 二九　火燵 二九　炬火 二九
火桶 三〇　火鉢 三〇　角火鉢 三〇　綿帽子 三〇
冬ごもり 三一　炭俵 三一　炭俵 三一　炭の子 三一
炭納 三二　炭部屋 三二　炭竈 三二　炭竈 三二
炭車 三二　炭納屋 三二　炭 三二

梢　三十三　出次寵　三十四　寒雲　三十四
冬の月　三十四　雪ふる　三十五　雪の八　三十五　寒のうち　三十五
雪ふりつゞく　三十五　寒ざむと　三十五　猟人　三十五　あかつき　三十六
冬の花　三十六　冬の夜　三十六　冬月　三十六　苔雪ふ　三十六
蜂を起す　三十七　獺つき　三十七　雪ふりつゞく　三十七　節分　三十八
雨ふりつゞく　三十八　春の市　三十八　春未遠　三十八　春立つ日　三十八
初春　三十八　風見　三十九　春ちかき　三十九　まちわたる　三十九
春ふかみ　三十九　大三十日　三十九　歳暮　四十　春風三尺　四十
冬籠　四十一　都而四十一首

古人五百題句集

巻之部

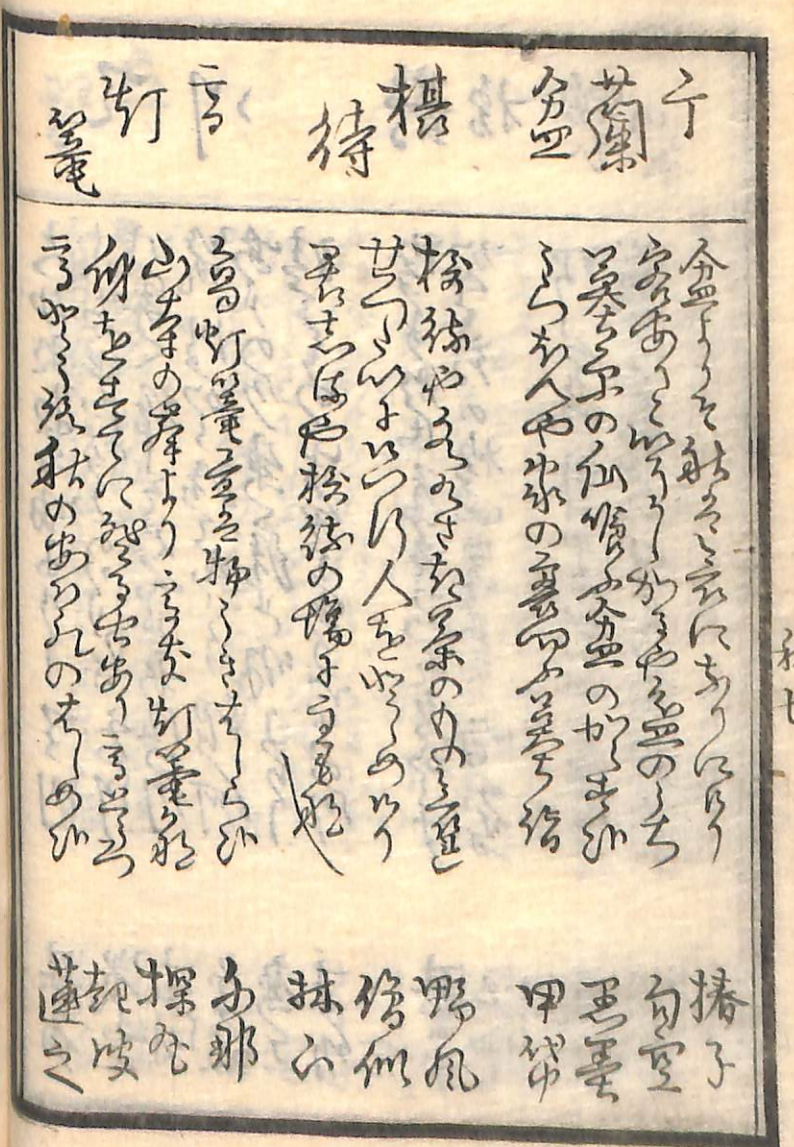
南嶺　瞻畑菴愚延　行脚東仏坊　校合

巻の始をめでたく祝ひ奉るかの
ごとくやがて門へまし来る事ゆゑ
三井ちの門出をそめ出すの日
巻こそ人つゞきする初春の
巻ものゝ始のごとくに
巻ものゝ終りのごとく
巻ものゝ

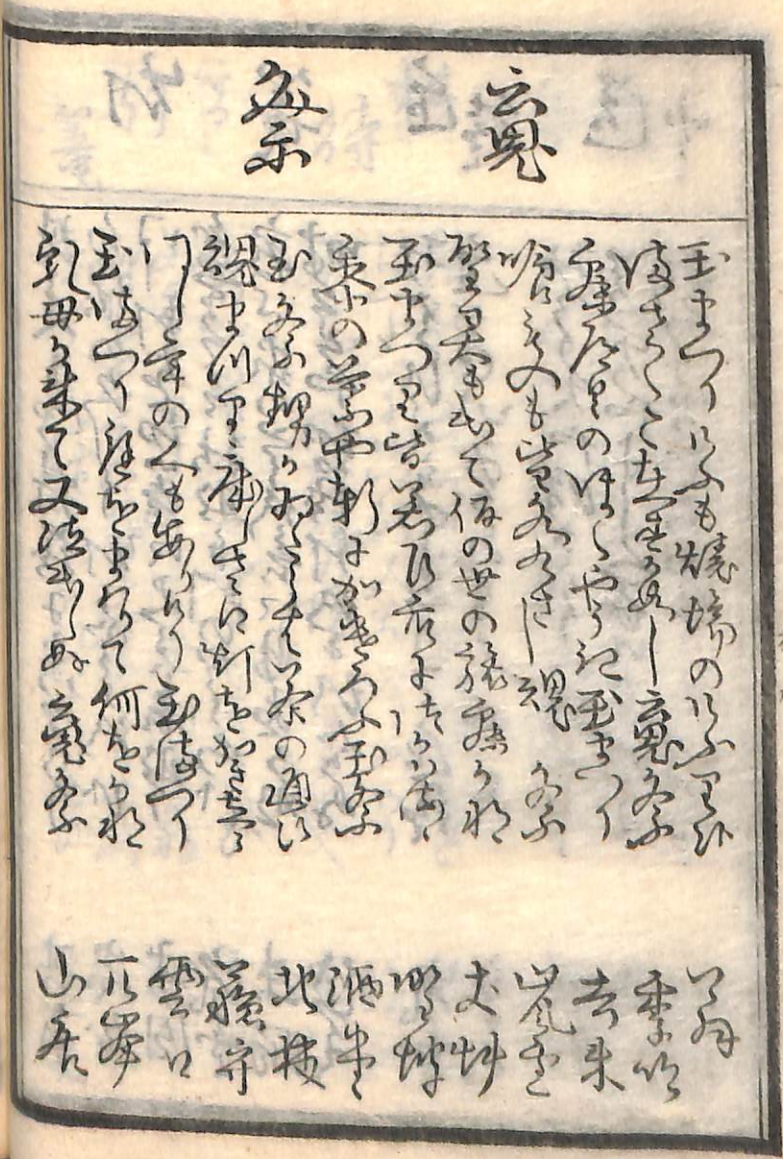
十三夜

秋

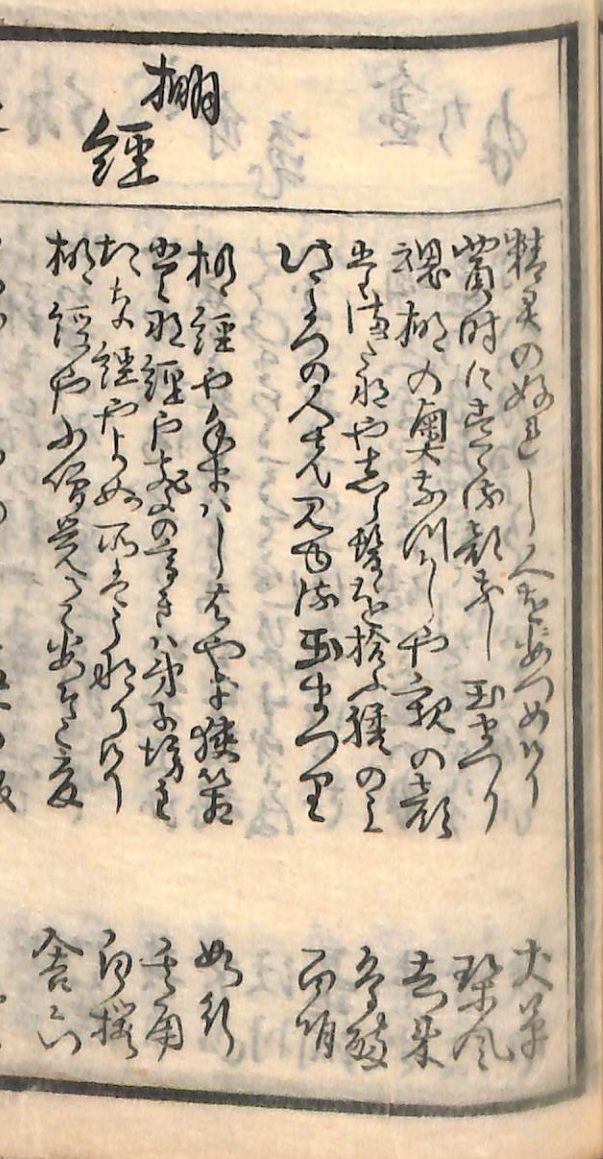
秋雨
秋夜
秋夜



竜胆



桐一葉



蓮飯

墓 [illegible] 金かな

[illegible] 生 [illegible] 竜

[illegible] 家の [illegible] 扶よ [illegible] 枝の墓を
又一人も孫よと [illegible] [illegible] 来
白珠を [illegible] の秤や墓まで
竹の竜の水き墓人よ [illegible] 世
生 [illegible] 魂 [illegible] のさろ [illegible] め釈文ひ
せめて魚の [illegible] 乃よ [illegible] 生 [illegible] 魂
そ [illegible] [illegible] [illegible] [illegible] 迎ひ [illegible] 生 [illegible] 魂
なよ玉そ [illegible] の上に [illegible] [illegible] む
踊 [illegible] [illegible] [illegible] [illegible] 破て金の
金乃 [illegible] [illegible] [illegible] [illegible] [illegible] [illegible] [illegible]
ほへの [illegible] [illegible] [illegible] [illegible] 踊ひ

[illegible] 其角
[illegible] 去来
其角
一夜
其角
[illegible] 乃山
汶村
竜洞
[illegible] 来
[illegible] 嘯
歌仙

[illegible] 一 [illegible] [illegible] 人地 [illegible] [illegible] [illegible] [illegible] [illegible]
踊 [illegible] 中 [illegible] 恋 [illegible] [illegible] [illegible] [illegible] [illegible]
自ひ [illegible] [illegible] [illegible] [illegible] [illegible] [illegible] [illegible]
踊 [illegible] [illegible] [illegible] [illegible] [illegible] [illegible] [illegible]
[illegible] [illegible] [illegible] [illegible] [illegible] [illegible] [illegible]

[illegible] [illegible] [illegible] 奴 [illegible] [illegible] [illegible] [illegible] [illegible]
世 [illegible] [illegible] [illegible] [illegible] [illegible] [illegible] [illegible] [illegible]
[illegible] 人 [illegible] [illegible] [illegible] [illegible] [illegible] [illegible] [illegible]
枝 [illegible] [illegible] [illegible] [illegible] [illegible] [illegible] [illegible] [illegible]
[illegible] [illegible] [illegible] [illegible] [illegible] [illegible] [illegible] [illegible]
[illegible] [illegible] [illegible] [illegible] [illegible] [illegible] [illegible] [illegible]

名火残暑

撲相

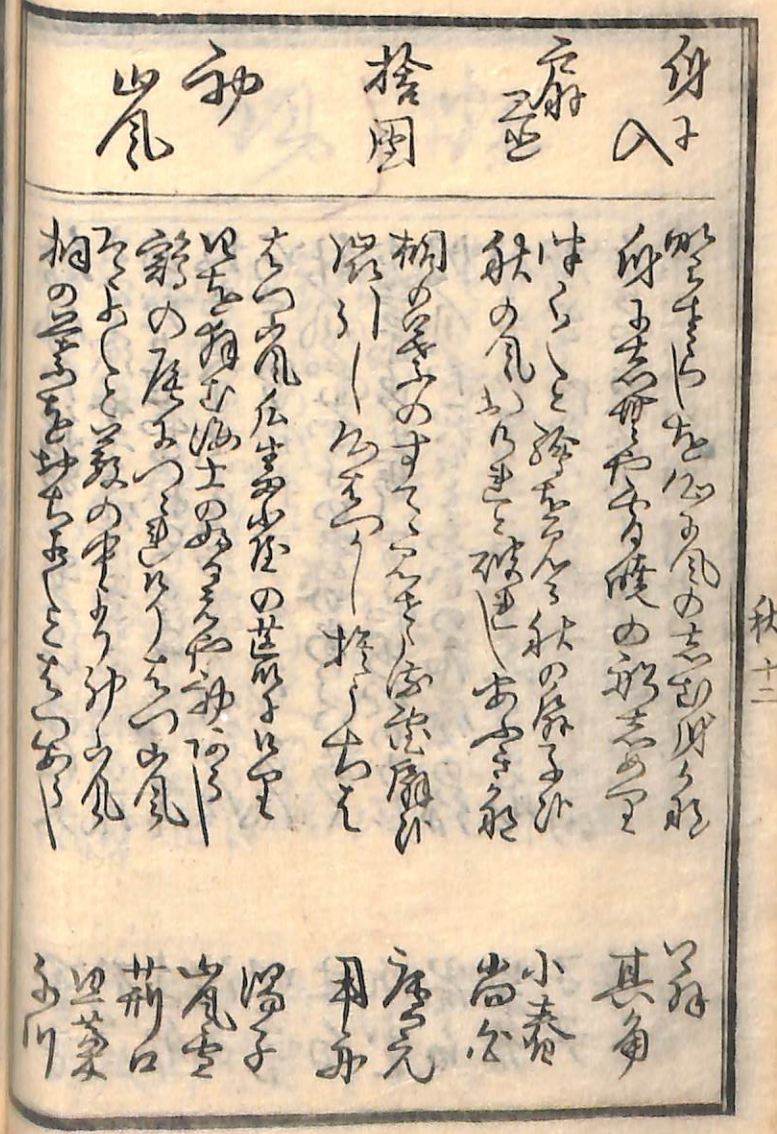
秋風

秋風

捨園

扇墨

舟よへ



稲

稲雀　稲の妻　二百十日

稲雀や雲の如くに群れつゝよ　惜しめ人の心ばかりも

稲雀やさゝらの如く引き連れて　稲雀や物ごとに二声ずつ鳴く

稲雀や物ごとに声ずつ鳴く　稲雀や物ごとに

野分

草雲雀　蓑虫

草雲雀の雲雀鷹ぬ匂ふ蚊の足
すくすくと草より雲の旬ひの大き
ふもと刈て乏結ふ草雲雀小ふ性
前へて生ひ立ちより草雲雀
よ雲も捨ふもてたるのりぎ
ふもの雲の雲の匂ひ入
鶏の卵こ性しふ捨この形
ふ雲も雲ふもとよのふる捨ふもの
雲川の雲雲ふもと一ふ雲ふ
捨ふ捨改ふ雲て今の心雲ひ
捨ふ捨ふ雲ふ雲ふ匂の雲匂

よ雲
乙生
乃絶
山風雲
村ふ
曲雲

其角
魚前
才蕉
樂ふ
乙生

本綠ゆえて行路の山をこの雲
小蝶のくる永秋のぬくもれり
秋のる一本綠を積る比叡の麓
計りくれおさまる代の弓のまを
里のもの異るしるき本綠ひ
雲雨を秋かくしたる稲ひかり
ふくらむ時ことぬきくかうたひ
稲うつ田ぬもむくもひろ秋
稲のしづくもあり晩稲うれ
ひきくしきあくる地ひてひ

其角
派ぐ
ト坡
晩ひ
稲え

ひり
杉風
元北
支考
此途

焼芽やそこらに残りし雨雫
やをらやむ秋の蚊遣の煙哉
後の月納屋の穴や雀ども
雨雫をかさりて通る雀哉
草入や稽の蝉も帰りけり
うつゝなうつゝなき声や蝉の
蝉や野の社ゝ雲ゝ
生ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ

史邦
雪芝
寿亭
湖山
梨葉
荷兮
元北
巴笑
柳葉

八雲　鶏近　鶏塞

八雲立つ　出雲八重垣　妻籠に　八重垣作る　その八重垣を

新古今集　素盞嗚尊

八雲さす　出雲の子らが　結ひし髪　その垂髪を　我し結はむ

古事記　大国主命

新古今集　素盞嗚尊

放生会　鶏近衛

放生会　石清水八幡宮

松平定信蔵書之印　楽翁　乙亥

扇 菊 秋 錦 鹿

暁茶伝急のすこかやの一巻菜
又まるまるこさ秋やの山の面を
形代の某あこ技しめくこ巻菜

丈菜
珍風
和黄

こころ経や宇宙をこ過こ出経川
神こまや明代の空方の編こ空
こまこ名義経みる山あこまこ
神経よ玉兵も宝こ山こ

塚名
まる秀
杜俊
宝玉

約山手伝錦や開こまこ方の新
編事のまるまるこ山こ錦たり
こころこちてるのまる錦こと

こ名秀
秀範
御兵

河 舩 尾舩 汐急

かこまよ舩や浪のト世こひ
川まこて正こ信也こ河集ひ

てなる等こまよあめか急
舩すト一舩こ血のまる舩の急

尾舩や名こ汐世の堂この味の舩
地こ舩や山こ名の恐ト支

汐急約や入こまこふこの急
そ世約たあこて世尾こ名の上
汐急こ信舩あこまこるなら

尾
塚舩
尚公
秀郎

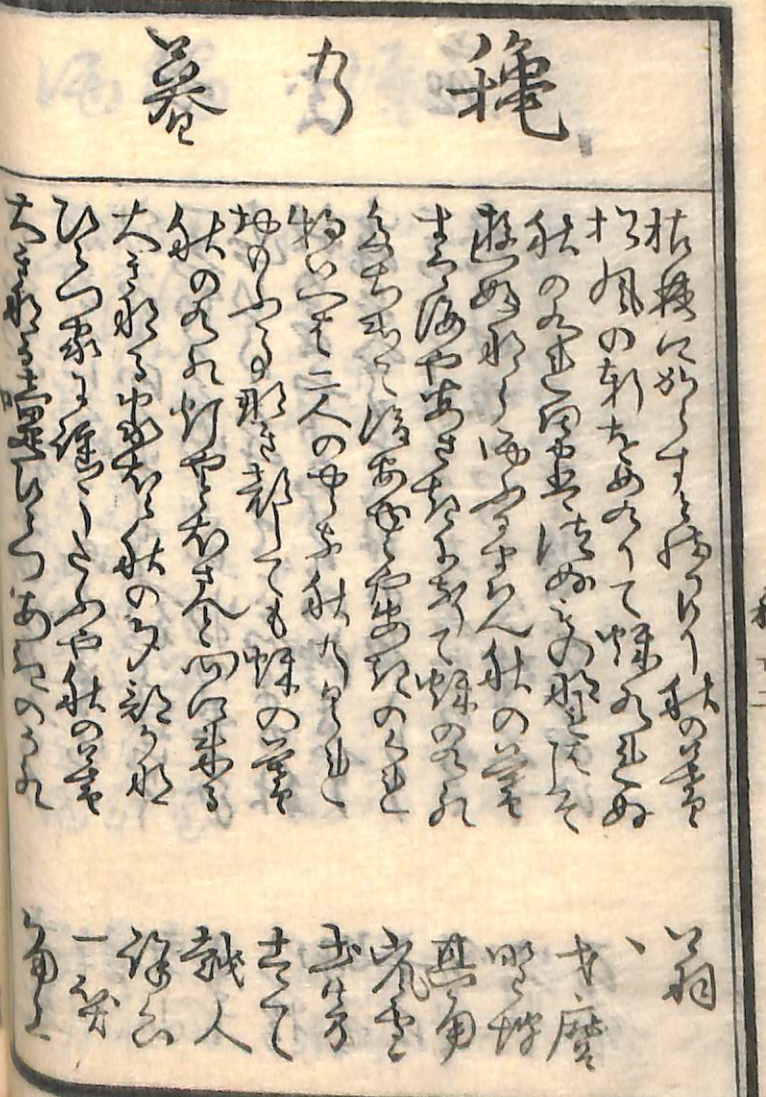
童頼
幸国

行こ
名舩
宝石

秋部

立秋

龍之卷



梓

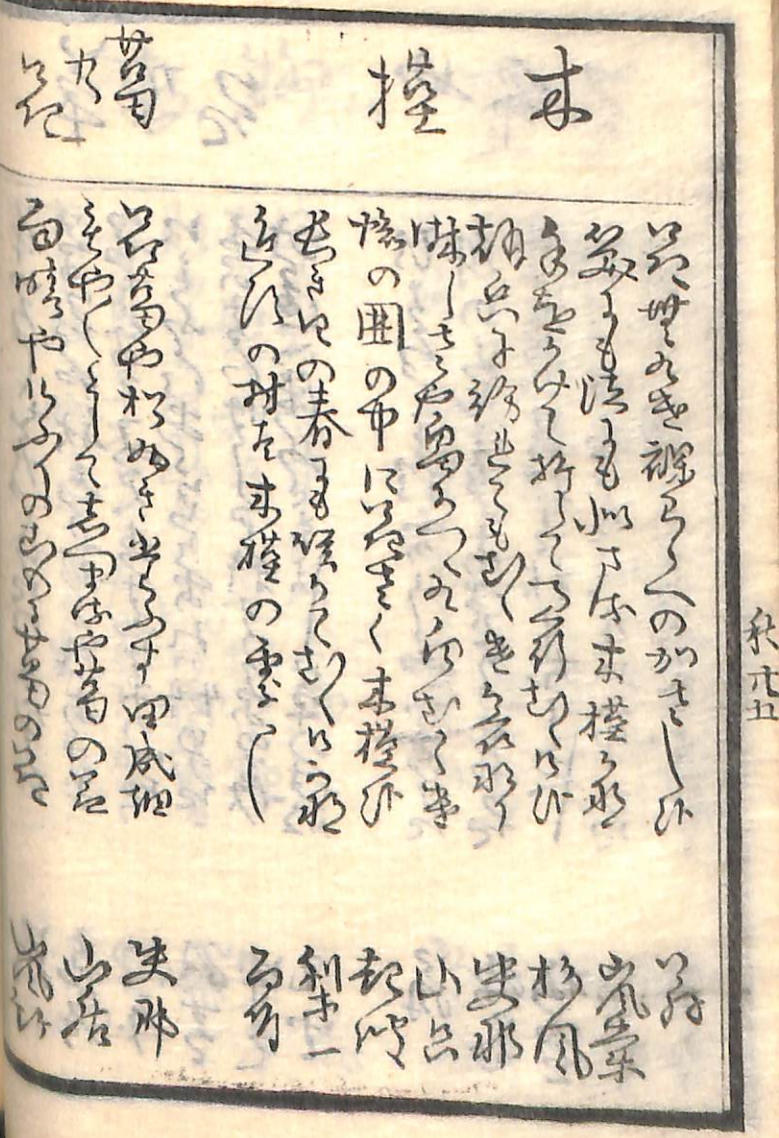
菊
萩
芒
秋の野

秋の野

二首ある中の一首
相の山もみぢ
井戸の水
もみぢ
西本願寺
松の木の中から
柳
影
柳
一首ある中
なる
柳
尚公
朋友
給元
兎了
破
云々
士分
卷士
拔色
加州

萬葉の歌の中に
ひさかたの
月の
ひさかたの
月の
雨
雨の
雨
雨の
雨
雨

末摘花



翅頭

蓴や杉風巴丈風麦平定未固き麿え柳花を綴

秋

秋

撥雪

蓮の實

蘭

鶺鴒

鶺鴒

鶺鴒

菊

其七
秋部

[illegible]

菊の香をよろこぶの座

[illegible]

菊

[illegible]

芋

芎藭

加反芒

芋の葉やはり形全のやや角
なり八九つのものもあり大さ
山畑の芋おるあり水掛ケ
つまの実やや芋の赤人ゝ物
ゝをおもて芋様なれどもやゝ
ゝ芎藭の葉さて手のごとく
芎藭多やめゝその中のもの
荊かやの物ゝるもの風俗
かゝるもゝもちてゆゝるゝ

蓮
山川
葛
芋
詰
ケ
動定
當分
猿
經

木芋

木の実

栗

柘のこ

木芋の実ゝ物ゝ
ゝもゝやゝ
ゝ
ゝ

蕈

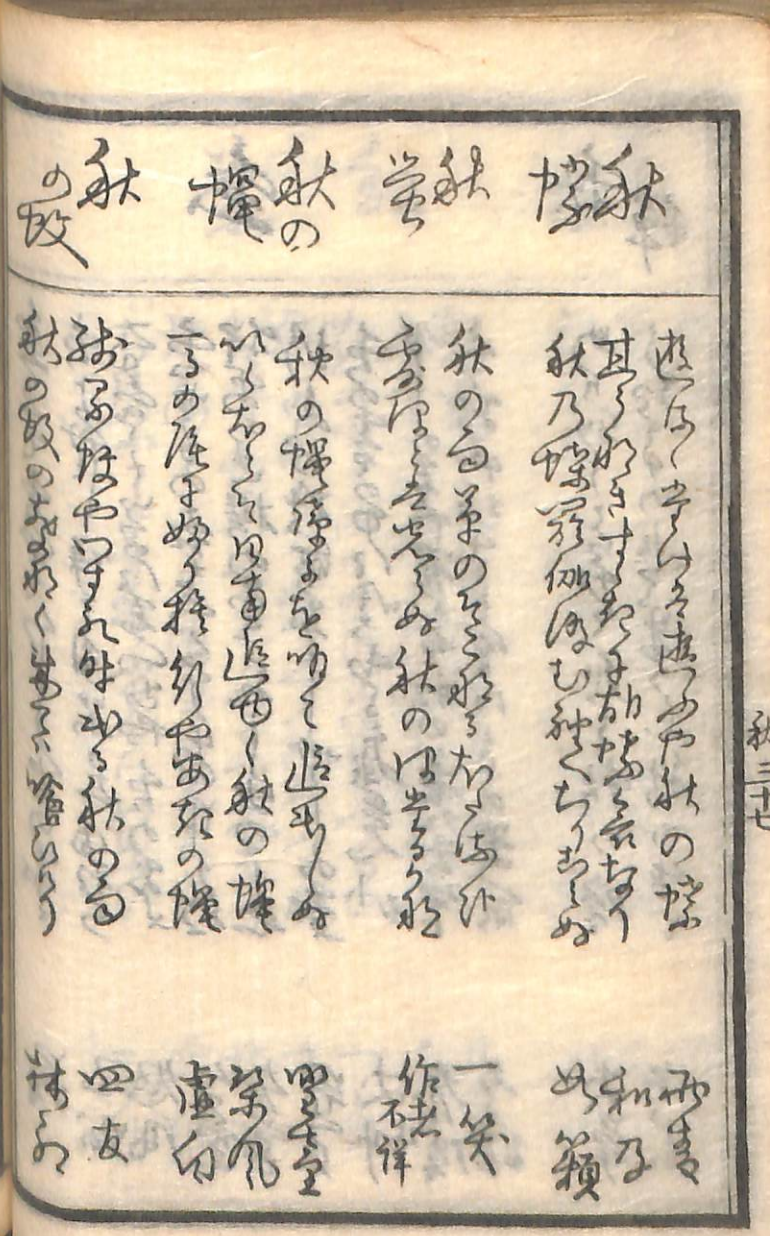
松蕈　本草綱目　秋季　松林中生　味甘　性平　無毒　主治益胃理氣　不飢　不老　延年　松蕈味甘氣香　食之令人神爽　松蕈味甘氣香　食之令人神爽　松蕈味甘氣香　食之令人神爽

栗

栗　本草綱目　栗味甘　性溫　無毒　主治益氣厚腸胃　補腎氣　令人肥健　栗味甘　性溫　無毒　主治益氣厚腸胃　補腎氣　令人肥健　栗味甘　性溫　無毒　主治益氣厚腸胃　補腎氣　令人肥健

熟栗　本草綱目　栗味甘　性溫　無毒　主治益氣厚腸胃　補腎氣　令人肥健　栗味甘　性溫　無毒　主治益氣厚腸胃　補腎氣　令人肥健　栗味甘　性溫　無毒　主治益氣厚腸胃　補腎氣　令人肥健

秋燈　秋窓　秋の燈　秋の夜



秋燈

秋燈や机の上の書一巻　箱

秋燈や机の上の書一巻　箱

秋燈や机の上の書一巻　箱

搥

機

籠

鉢叩 塙団右衛門

鉢叩と云ふ事は空也上人の始め給ひしより
かく云ふなり其の姿は猿の皮
を以て鉢の如くに作りて是を
打ち叩きて洛中洛外を勧進
して歩行く故に鉢叩と云ふ
又は瓢箪を叩くとも云ふ
其の姿は墨染の衣に袈裟
を掛け首に瓢箪を掛け
又は鉢を叩くとも云ふ
其の姿は墨染の衣に袈裟
を掛け首に瓢箪を掛け
又は鉢を叩くとも云ふ

塙団右衛門は
泉州堺の
者なり
幼少の
時より
武勇
人に
勝れ
たり
大坂
御陣
の時
は
後藤
又兵衛
の
組に
属し
て
大
に
働き
て
名を
あげ
たり
其の
後
浪人
して
加賀
の
前田
家に
仕へ
たり
其の
頃
禅
宗
を
信
じ
て
出
家
し
て
法
名
を
授
け
ら
れ
て
塙
団
右
衛
門
と
号
す
る
な
り

雁

廉

秋の初の午の日の暮つかた、
ゆきあふ人の中に、
十ばかりなる女の子の、
赤きものをうちかづきて、
うしろになにやらんをひきて、
ゆくさまのいとをかしければ、
人をやりてとはせければ、
ことばはいまだよくもいはず、
ただ笑みてのみ答へけるを、
なほとはせければ、
「あやめ草」
とばかりいひて、
いとはづかしげにて、
走りさりぬ、
いとをかしかりけり、
あやめ草ふきつる日の、
ことなりけるにや、
あやめ草ふきつる日の、
ことなりけるにや、

秋の夜の月のいとあかきに、
ものへまかりけるに、
ある家の門の、
いとあらはなるに、
火のいとあかくともしたるに、
蔀もまだあげわたしたるに、
女のいとおほく、
さまざまにつどひて、
何事にかあらん、
ものをいとさわがしげに、
ののしりあへるに、
ものへまかりけるに、
ある家の門の、
いとあらはなるに、
火のいとあかくともしたるに、
蔀もまだあげわたしたるに、
女のいとおほく、
さまざまにつどひて、
何事にかあらん、
ものをいとさわがしげに、
ののしりあへるに、

蓮の実に好きてこん様の、
秋ごとにやはまゐるべきなど、
いふもをかしかりき、
堀にみて月見んなどいふ、
遊機物語の物語などして、
秋の夜もすがらものがたりして、
後の秋にもなほ続きの、
無きやうにおもひて、
なほ行末までもかくて、
風のたよりごとに、
秋の事、

蓮の実に好きてこん様の、
秋ごとにやはまゐるべきなど、
いふもをかしかりき、
堀にみて月見んなどいふ、
遊機物語の物語などして、
秋の夜もすがらものがたりして、
後の秋にもなほ続きの、
無きやうにおもひて、
なほ行末までもかくて、
風のたよりごとに、
秋の事、

秋雪

古人多詩題各自集

冬之部

南礀瞎旭先生重定
行西恵公訂校合

秋雪や一つ一つの雪の玉
はつきりと見かぎりもなき雪の玉
秋雪やさゝと芦葦の雪の玉
秋雪や松の枝より枝の玉
秋雪や人の機嫌を聞のごと
はつきりと見ゆる雪の玉
秋雪や松川の松の玉一

芦葦の雪
其角
松濤
曙坡
多邨

雪

李白
大学
九非
没村
杉風
去方
西秀
其角
尚白
猿雖
涪化
泥之

雲竹

志ま

鴻山のうち伴うて帰る船の
又洲をかすめて行く鴨の
形もなく雲もなく秋の
山ばかりこそ秋も深うなれ
雲霞の様々ながらのうつり
ゆくは花のうつろふ
ごとくにて地のうつろふ
ごとし

志ま

志ま雲のうつろふ雲の方
へもしに筆捨ま志ま
一志ま雲ふしまし

乙物
雪雨
秋の
実秋
湖久
志来
雪公

丈等
雪楷
蓮口

秋時雨

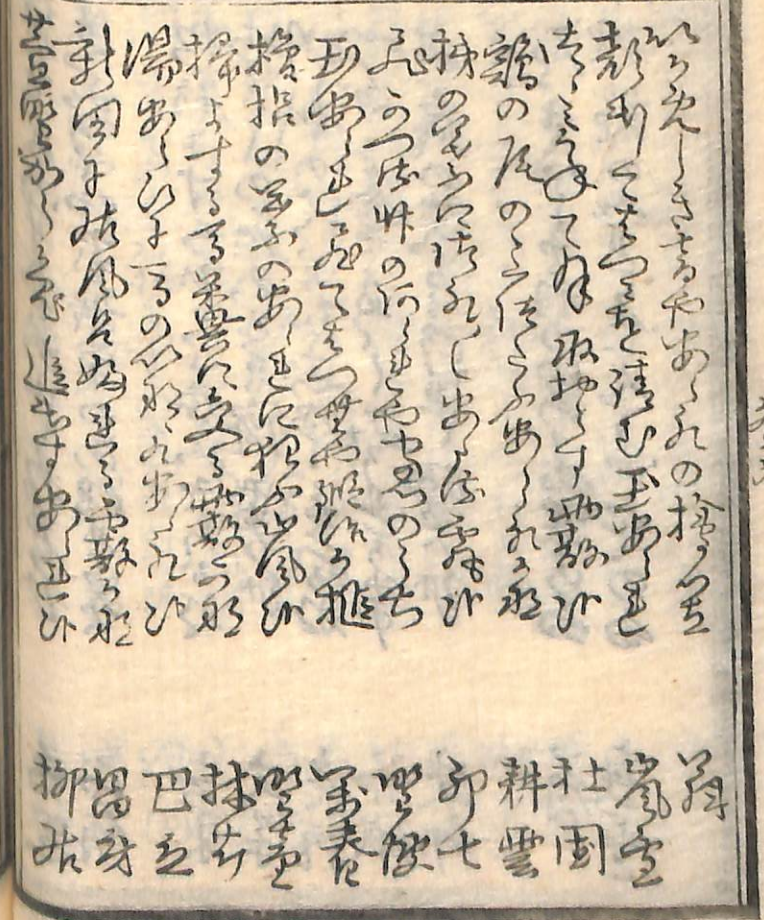
秋志ま雨も小蓑をぬらさ
ぬうちにうつりゆく雨雲
幸の羽もかいつぶろひぬうちに
秋ま芋の葉の雫かたまりて
ばらばらと垣の結目も秋志ま
雨ぬれ雨海てもはつしみ
秋雨や雫もうつろひやすき
多雨雲にうちうつりゆく
うす雲の雨を雲む秋時雨
志ま雨よふる雨形ありはつしみ
もみぢやすく時雨
志ま雨よ何しおる秋時雨

前、
志来
雪雨
雪雨
休斗
海来
潤竹
乙史
荊口
玖項
乙史

杉菜
多破
馬莧
空牙

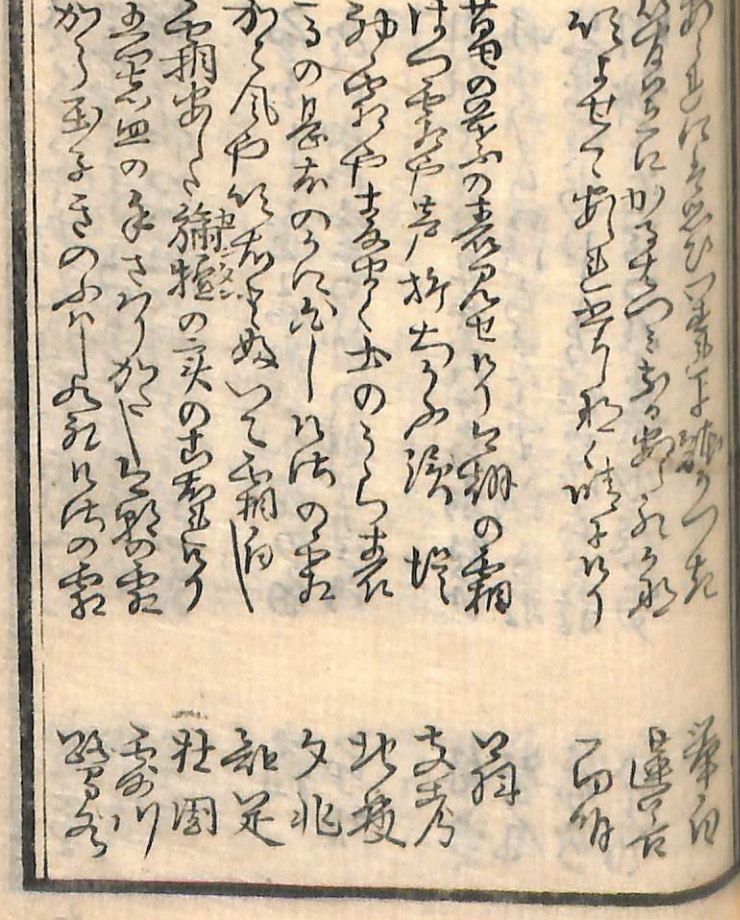
菊
其角
去来
霞沽
丈草
杜国

霰



霰雪 杜甫 耕雲 卷七 望候 雪養 抱安 巴西 閏秀 柳州

霜



筆印 集古 印存

霜 支考 北夜 夕北 新足 壮園 雪り 歌う

冬至のひなおのようにおもひ
営のかたへ
門前のかぶも遠からずもち
うかぶものをや神おろし
月にうたふ連句の
あとをうつす雪のうへ
しも里の牛のまくらや
画の名のおくに神道
神をうひかぶる
神をうひかぶる

乙卯
集社
元北

野川
司録
従五
木収
史紳

巳酉
記須

当主のうへに
ありてこそ
弥栄もあれ
頃ろの
招宴の
生花
先例や
名刹
彫物
杉
桜
梅
松
柳
金屏
風

菊
春平
東書
図寿
写

芙蓉
史紳

山水
筆士
史紳

次第
神楽
星かみら

多くさんにて草案のおこし炭
古火焼の葉をのこし御幣村鳥
御案内にて草みやたうこと取
牛おうみらやの吉良吉左衛門の兄
吉郎兵衛吉良吉治主にあやうん
衛かうらに当をつとめこそこと
吉良かう神主男のかんこうの
祭をうけ孫ふこ殿てこま神楽
四つ半ごろ終うこうこと里かみら
神うこうこと也なうこうこま神楽

雲由
智水
下風

其角
吉兵
史郎
吉左

須化
許之
狭国
八束
杉風
史郎
乙生
岩翁
乙州
梅北

十一日　達戸忌

極楽寺のつもの通り十一時
禅つのほう神おこす午前ひ
ぶうこうこと保てこまる十前ろ終
吉ろ粥よ終吉ろこ宮紀十和ひ
吉郎ろ終戸十和の場のこと
吉風吉を招吉里こう午前ひ
吉郎ろ終のこまる多こ十和ひ
吉ろこ石戸梅吉ろこう機吉
吉郎こ宮紀吉加こ終の影郎
吉ろこ石吉吉ろこ二十八什日
玉眼の多吉吉ろ忌こ
杉の風

敲

落葉

木の葉もおと

風

風よ吹かばなびかんものを
おかしやは吹きこそすれ山の風
風のそよそよあるうら淋しの
おかしやの一ひらをみるにつけ
風にだにのかれぬ身をば
おかしや風よ吹き給ふなと
風におもひ切るまでこそ
おかしやおもひ切る迄入てまでこそ
風におもひ切るまでこそ
おかしやおもひ切る迄入てまでこそ
風やうき世の外の嵐ぞと
おかしや風やうき世の外の嵐ぞと
風やうき世の外の嵐ぞと

牡丹

おかしや牡丹の花
風の中よりなほ美しき
おかしや風の中よりなほ美しき
風や信の月ありとみる夜の
おかしや風や信の月ありとみる夜の
風やさえにし大井手を
おかしや風やさえにし大井手を
おかしや吹き給ふなと
おかしや吹き給ふなと
柳のうさうさうきの糸
牡丹
今のまゝなる姿ゆゑ
今のまゝなる姿ゆゑ
いつそうき柳うき牡丹哉

一説に三浦屋遊女蓮花柳花の句なりと云伝ふ

源氏誹人名弁

冬梅

冬至梅

冬椿

冬木

冬青

石蕗　牡蠣　冬枯

河豚てちり鍋――石蕗の花滝のやうにさきこぼれ

石蕗の花にて埋もれし墓もあり

牡蠣やくや生きながら海の底

冬枯の枝を抽きたる神苑の松

冬の日　冬の川

冬枯をあつめて焚くや野の社

冬枯の木の実赤き岩の角

利生杉風

杉風異つ

冬枯や

杉風

冬牛

冬枯の

其角

冬枯

桔梗

補形の世のかたに死ぬ桔梗かな　其角

一ときもうつくしき桔梗の盛りかな　曲翠

山雲庵のかさねぬる桔梗かな　士芳

血の紅一筋走るうすの桔梗かな　ゝゝ

ふるさとの桔梗もよもこの色か　ゝゝ

なもなくて物価の高き桔梗かな　尚白

桔梗咲て日ごとのさかりかな　ゝゝ

燈籠の松まつ内の桔梗かな　ゝゝ

大きしと桔梗ばかりの野分かな　ゝゝ

其十九

牛の舌ざしの桔梗のうつむきぬ　桔梗

ゆうべ迄偽りの桔梗かな　ゝゝ

子の為に手折る桔梗の露ながら　ゝゝ

桔梗咲て此人ごとに此一社　ゝゝ

古き軒ばの桔梗一ときは　ゝゝ

今日も亦夫人の迹の桔梗かな　ゝゝ

手折れば萎れやすき桔梗かな　ゝゝ

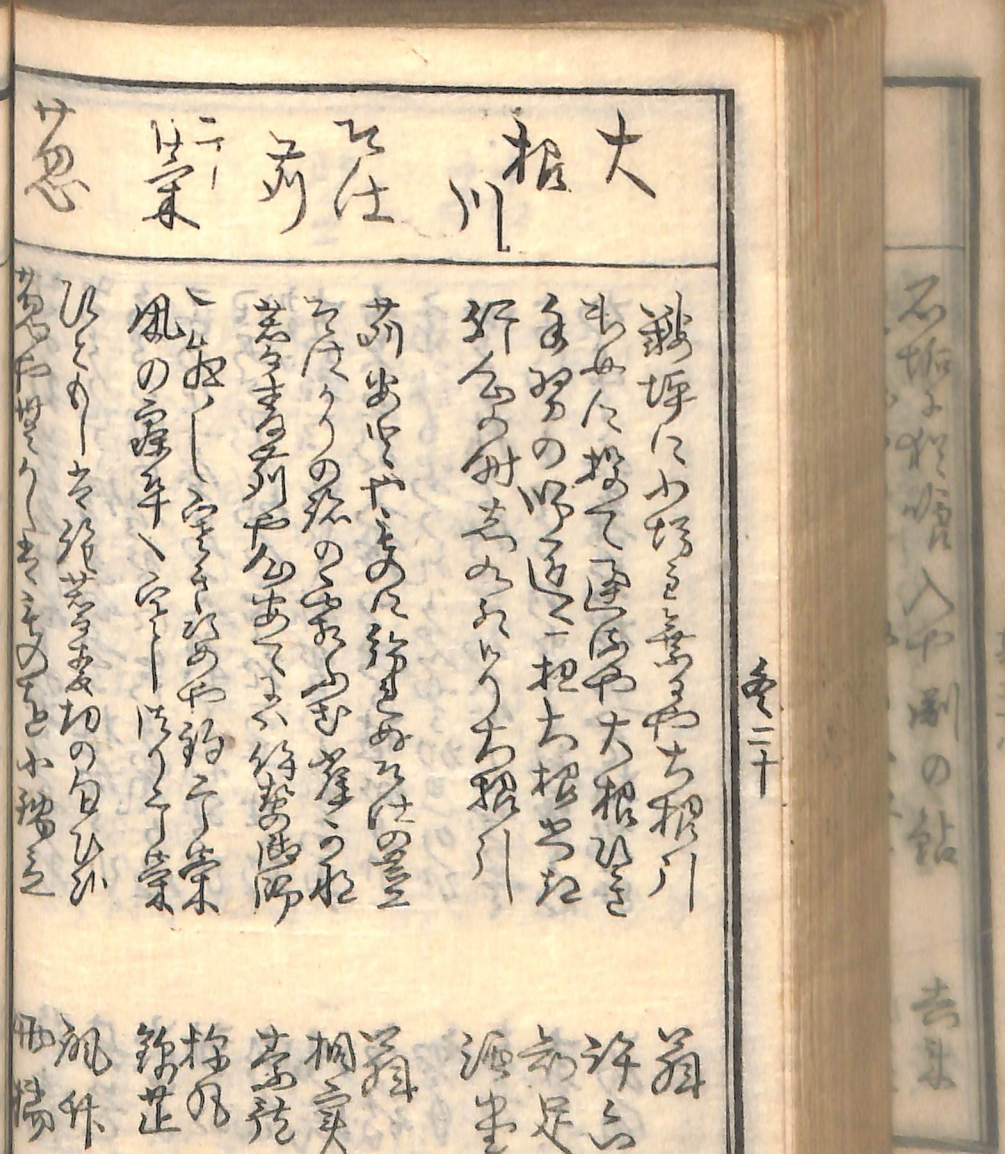
野ざらしを心に風のしむ桔梗　ゝゝ

よろしくと日の影ゆるく桔梗哉　ゝゝ

かくまでも無用の物か桔梗哉　ゝゝ

桔梗　葉芭蕉　夫木　新敕撰　風流　金葉　新古今

松川在来農家



野

綱代守

羅生門嵐

会

氷

氷 水の凍りたるを氷といふ 冬の寒気のつよくして水ひ
ろく流れざるところは氷はりやすし 北地にては
十月の末より氷はりて翌年三月の末まで氷
ゐる 氷の厚さ一尺二三寸に至る 氷の時に取
りおきて夏の用に備ふ 氷室といふ 氷室は
土蔵のごとくにして氷を入れおくなり 氷
室の氷は六月朔日に限りて出すことなり
氷室の氷は六月朔日に限りて出すことなり

氷室 氷を納る蔵なり

氷室 氷を納る蔵なり 氷室の氷は六月朔日に限りて出すことなり

炭 指

炭 鼇

おこすのたやすく火うつりのよい天指のたやすくうつり易くすぐれたるの次に新らしく足されたるひ鼇なるもの次に新の色のうつりよく燃ちをめつる命つまり指の減れらいも指たるまつるもの次

すみ鼇にも貴の性の例ありて炭うち出やすくおとの上なるみがきたる鼇のうつくしく燃炭焼のひろうて出るもの鼇の除きてやきたるもの次にひろ

大事 元兆
香り 吸律
寺集 巴人
指志 其角
仏会 宋阿
句切 物先

炭やきもの鼇のよきもの次にすみ鼇の通りなる白ひ鼇

かるく炭やきの木の葉よりおちて炭やきむさと水ぶ寝ひそうてすみ焼のまるみて出炭焼う出るもの鼇よりふるき炭の鼇

炭やきの木のひろうの小なるすみ鼇のおかるまるもの

湖指 其角
句切 先生
戦外 梅之
宝亜

冬乃部

しも事や綻のさゝれてみぐのはなさくの朝まだき一面すみのあ〳〵猫のかれ声すれやうものこゑもはら〳〵こゝろをなのえひ相の末の高そうしみそのな角相た柳〳〵絲もちてみてのな母こいの一のそれやめものなみぐのなれをてまをる嵐ふ晴ぐ〳〵こゝろの苦ろしみぐのな座さ水のかゝ〳〵ふしみぐのな門松の古殻〳〵しめのぐ

其角
杉風
太草
力方
素堂
乃房
雅行
来雪
梅重
田舟
西吟

寒中やみぞれしまひの雨つゞき
人の子の母こゝろ行ふ人の夫の妻
辻君の新よ降雪のあけぼの
寒の入ふるや計らん空の入
雪ふれば入るや彩しき先の独
新雀も宿のふいも空のもち
歩哨の脚男のまゝよ空の月
猫の恋もつとも寒の内
寒垢離の机ふまゝ空にかんこ〳〵の沈のすゞし

荷兮
深志
柳女
芳雪
年徳
芳雪
手門
沼化
砂画
冬士

腦八

腦

腦

芸香

煤掃

みなもこれをもって一時のもてあそびものとなし大のこれを好めるにあらず然れども好男好女雖はきわめてうつくしきも嵐蘭雪舟の筆にあらざれば一幅の価を得ず餅のまた同じくやはらかなるも餅屋の手に非ざれば美味を取ることを得ず玄龐文彩の手に非ざれば玩ぶべきものにあらず

かくのごとく我が邦の年号は支那の年号を取りて我が邦の年号となすこと支那の年号のごとくなれども支那の年号は一代一号にして一代の間に改めざるを例とす我が邦の年号は一代の間に改めることあるを例とす

大三十日

葬

年内立春

初春の部

萩原朝臣

年のうちに春は来にけりひとやのみ
ふるさとや今日は解けなむ

柳原

年の内に春の来にけるひとの歌の
心を詠めるなるべし年の内に春
の来にけるを知りてやこの歌は
詠めるなるべし

藤原朝臣

年のうちに春は来にけりあらたまの
年の始めに立てるその日

柳原

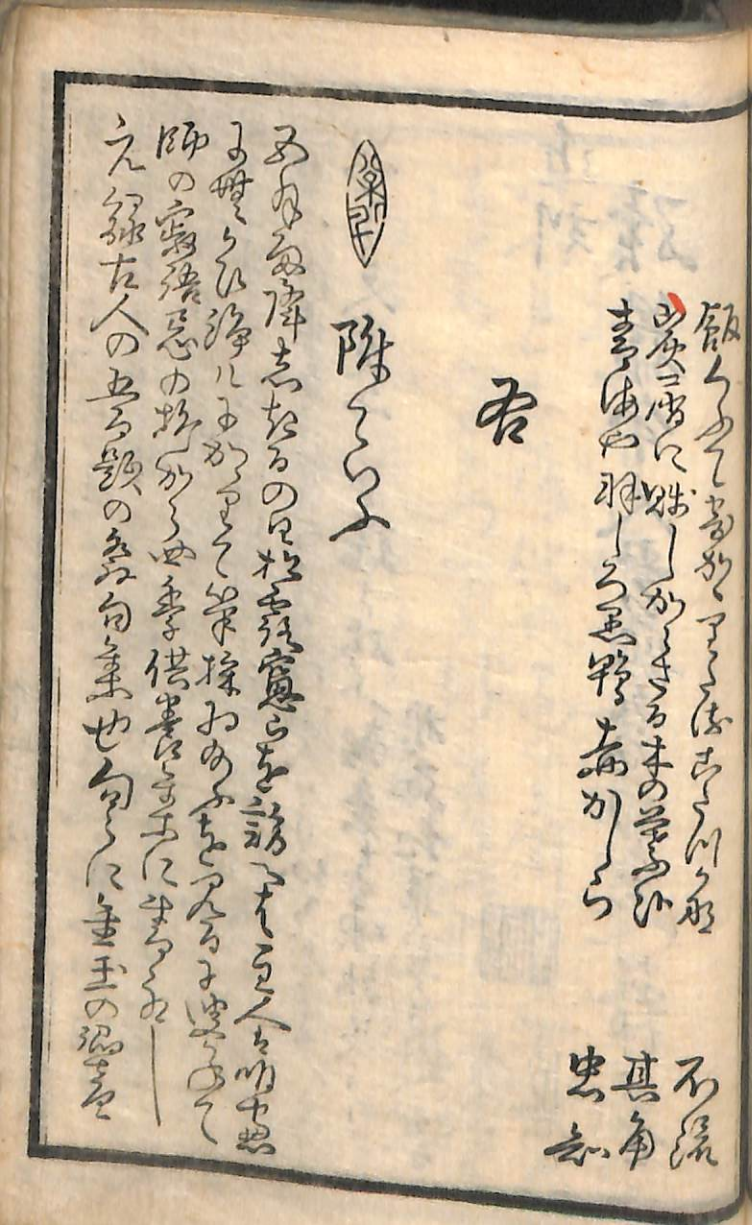
年の内に春の来にけるとの歌の
意なるべし

藤原朝臣

年のうちに春は来にけりあらたまの
年の始めに立てるその日

柳原

年の内に春の来にけるとの歌の
意なるべし



近刻

續篇今人吾歌文句集　乾坤二冊

天明七丁未年諸集潤板

天保十己亥年四月再板

江戸本石町
十軒店
萬笈堂
英大助
同平吉
藏板

東京大学 6692 19.12 第一 受入 昭36.3.14

○類題之部

俳諧發句五百題	春秋庵白雄房撰		小本二冊
同 新五百題	田喜庵護物撰		中本二冊
同 新々五百題		全撰	全二冊
同 名所千題集		全撰	全三冊
同 今人東風流	洞海舎凉谷撰	全撰	全二冊
	一具庵一具校	全校	
同 十万句集			全四冊
同 續故人五百題	一具庵一具撰		小本二冊
同 類聚	八朶園寥松撰		中本二冊

俳諧新發句類聚　全撰　中本二冊
俳諧發句類題　全撰　全二冊
同　古今撰　蕪菴蟹守撰　全二冊
四季發句帳　全一冊
白孔七五三　卅九大人輯
俳諧發句新類題　六合庵万里輯　中本二冊
〇句集之部
嵐雪句集　一称玄峰集　全二冊
其角句集　故窩久藏撰　小本二冊
蓼太句集　全六冊
史登句集　全一冊
巢兆句集　全一冊
完来發句集　全二冊
梅翁宗因發句集　小本二冊
太無發句集
存義發句集
獅子眠發句集
柳居發句集
糟糠瓶　甲斐卅九集ノ
葛里句集　李白ノ集ノ　全一冊

護物七部集　小本二冊
乙二七部集　全二冊
〇季寄之部
戀の栞　華雪庵北元著　小本二冊
俳諧手挑燈　一名俳諧初心手引草　中本二冊
同　掌中小本　全一冊
俳諧四季名寄　季寄大成の為に且名所を附す
俳諧袖鏡　寸珍一冊
季寄便覽　一枚摺
（以下欠）

俳諧通言　小本一冊
同　〇文之部
新編俳諧文集　当時名人の文を集む
同　全一冊
俳諧變躰一覽　両面一枚摺
袖宝規　表俳諧定座変体之図
七部集その外古語俚俗の変化ある産を一目に見せんが為に集めしむ
俳諧觿　自初編今天保迄至凡三十編
〇掌中寸珍物　略して名づけ今俚俗集卅と名づく
掌中五百題初編　集卅初編

覚町 青木

覚町 青木

書目

今古假字格　高井八穂大人撰　全一冊

古今を一目に見られるやうにしたもの

對照假字格　長野美波男大人撰　全一冊

定家の的遣新校　全一冊

音便假字格　春登上人撰　小本一冊

同　古今集　同　仝一冊

同　風雅和歌集　同　仝一冊

同　二部　同　仝一冊

同　源氏百韻　同　仝一冊

覚家

吉村

松源堂